創甲道化織鐵

植木屋工房

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
創甲道化織鐵

【Ｎコード】
Ｎ３７２７Ｙ

【作者名】
植木屋工房

【あらすじ】
インフィニット・ストラトスと呼ばれるパワードスーツの開発と重要度の偏重により、女尊男卑の社会となった世界。
ＩＳの操縦者を教育するＩＳ学園では、クラス代表を決める決定戦が行われていた。
戦闘は進み、激しさを増し、互いの技量と強さを認め合う篠ノ之箒とセシリア・オルコットを謎のＩＳが襲撃する。
激戦にて疲労困憊の二人をさらに甚振る謎のＩＳ。
そして、突如出現する謎の黒い穴。（ワームホール）

その穴から膨大な量の白髪を伸ばした謎の男が流星の如く現出し、舞台は更に混迷を極める。
謎の男に箒とセシリアは思考停止し、千冬は懐かしさと焦燥を感じていた。
千冬は男に、いなくなってしまった弟の姿を透かしていた。

織斑一夏がいなくなった世界に現れた、奇矯な劔冑を纏う男。
それは、インフィニット・ストラトスの世界を劔冑と漂流者と廃棄物が乱世に変える最初の雷鎚であった。

――これは英雄の物語ではない。
漂流し、帰還した道化の物語である。

序編／紡剱騎（前書き）

このようなサイトに投稿する初めての作品となります。
クロスオーバーや性格改変、独自に考察した設定が苦手な方はご注意ください。

序編／紡劔騎

――これは英雄の物語ではない。
悪鬼の物語でもない。
ヒトの物語でもない。

創甲道化織鐵
帰郷編
第零編／紡劔騎

――双輪が描く軌跡のように因果は廻り、運命は廻る。
装甲悪鬼村正の物語と縁もゆかりもない役者と舞台を揃えて、
装甲悪鬼村正と縁とゆかりがある役者を並べて物語は紡がれる。
故にこの物語も次のような開始文句（オープニング）から始まる。

この日の舞台は計四幕。
第一幕は、決闘であった。

軽やかに、そして澄み切った風を切る快音が二つ、上代の闘技場（コロセウム）を思わせる建物から響いた。
音源は兵器の繰手（くりて）から生まれている。しかし武を振るっているのは青銅の鎧を纏った無骨な拳闘士（グラディエイター）でも、蒸気となった気息を吐く汗馬でもない。

美美しい肢体を晒して空を舞う乙女達（ワルキューレ）だ。
空を舞う美麗な鎧。
この甲冑こそが翼である。
世界へ拡がり、軍事の重要度を偏重させた翼。
ならば妖精が飛ぶような軽やかな、そして澄み切った音を出し飛翔する鎧とは、ある機械に他ならない。
〈ＩＳ〉である。

〈ＩＳ（インフィニット・ストラトス）〉――
天災　・篠ノ之束が約十年前に開発したパワードスーツにして、世界情勢を激変させた功罪の産物（おこ）である。
元は宇宙開発用のマルチフォームスーツであったが、〈白騎士事件〉を経て、その従来の兵器を圧倒する性能故に軍事転用された兵器である。
そして世界の蒼穹（そら）は近年創作されたＳＦ小説の一場面のように、自在浮遊、慣性制御といった航空力学を無視した四文字が飛び交うようになった。

ＩＳには空想科学的な兵器がまかり通る。
世に溢れるＳＦ小説が物質を持って引っ繰り返された。

――女性だけ。
そう、女性だけである。
何故かＩＳは男性を拒絶した。
何をしようともＩＳは男性には沈黙し、女性には饒舌を持って応えた。
――女尊男卑。
世界の共通常識がまかり通った。

性急すぎる変化であった。

女尊男卑思想を父への幻滅から強く持つ、ＩＳを繰る少女は闘っている。

そのＩＳは蒼かった――

成層／蒼穹（ストラトス）の名に相応しい蒼さである。

四肢を覆う装甲も蒼く、主力武器の子供のような〈ビット〉もまた青を基調としている。

機体名を〈蒼の雫（ブルー・ティアーズ）〉。

青く、蒼く、碧い――様々な青を溶いて混ぜ合わせたかのように蒼い機体である。

セシリア・オルコット。

英国代表候補生にして、クラス代表の立候補生。

鮮やかな金の髪と自身の機体に負けないくらい碧い瞳を持つ、眉目秀麗の少女である。

巨大な主力武装〈スターライトｍｋ？〉の引金を引き絞る。

砲口から吐き出されたのは爆音と共に飛翔する砲弾ではなく、直線の光（ひかり）。

レーザーだ。

六七口径の砲口から吐き出されるに相応しい極太の直線が、紅い機影に迫る。

「ふっ！！」

桜色の唇から裂帛の気息が吐き出される。

そして光そのもの、光速そのものの武威を――――――回避した。

どのような剣士の突きよりも鋭く、戦車砲よりも速い貫通の暴威を、張り巡らされたシールドの寸前の寸前で退いて回避した。

両者の位置を平面で見れば、斜め上に上がる直線の光を斜め下に瞬時に移動して回避したと解る。
極微の消耗の見切りである。
見(ケン)の力――剣の道の力である。
剣道の足捌きであり、体捌きである。
浮遊する身の上でありながら、心魂まで叩き込んだ剣道の理をＩＳ戦の理と混ぜ合わせ、ＰＩＣ(パッシブ・イナーシャル・キャンセラー)の緩急の操作によりレーザーを斜め後ろに引いて頭上を素通りさせたのである。

「――――避けましてッ！？」
青の機影から驚嘆の声が上がる。紅の機影はそれに剣ではなく口舌で応えた。
「――只の足捌きと斜線の見切りだ。撃たれる前に斜線から逃げればいいだけだろう？」
その人を食ったような台詞に、気高い心を持ったセシリアは評価を改めた。
改心である。
信じていた間違いを間違いと認め、新たな正しさを刻みつける。

血縁のコネだけで第四世代という、世界の誰も手にした事のない最新鋭のＩＳを手に入れたと思っていた。
適正Ｃランクで、Ａランクの自分に挑むなど片腹痛いと思っていた。

――とんでもなかった。
鳶が鷹を生んだ家系である。否、鳶が篠ノ之束という地海空宇宙対応合成獣を生んだ家系である。
オカシイ鷹だ。篠ノ乃箒は。

篠ノ之箒。

名字が示す通り、天災の縁者――実妹である。
長い黒髪を馬の尾のように束ねた、剣道小町のような凛とした少女である。
否、彼女は事実剣道小町である。
全国大会優勝者――
伊達や酔狂、生中な努力では辿り着けない栄誉を獲得している。
執拗な取り調べから来るストレスをぶつけて強くなった実力であるが、錬磨を刻んだ身魂は相応に強くなっている。
魂の方向性や素材は兎も角として――強い。
空の王者である鷹を比喩に上げても良いほど、空を飛ぶ彼女は強かった。

そしてその強者が駆る機体は第四世代機〈紅椿（あかつばき）〉。
〈ブルー・ティアーズ〉に比べて格段に多い装甲――否、装甲だけでなく、他の性能も頭一つ分飛び抜けて高い。
強者に強力な武器。
デュランダルを振るう最強のパラディン、ローランのように彼女の“強さ”を〈紅椿〉は引き立てていた。

彼女は強い――
だけど負けてられない――

セシリアはその感想を胸の炎にくべ、さらに心を奮い立たせる。
「素晴らしいですわシノ――いいえ箒さん。さあ踊りましょう！！
ＩＳ同士が奏でる円舞曲（ワルツ）を！！」
それは相対する者を心底好敵手として認知した誘いだった。
その言葉に箒は、
――ほんの少しの両親との会合。

――ほんの少しの実姉との歩み寄り。
――ほんの少しの恋慕との別離。

「生憎踊りなんてト神楽舞しか知らないが、踊ってやろう！！」
威勢を持って剣嵐舞踏（ブレイド・アーツ）への要求に応じた。

第四世代ＩＳ〈紅椿〉を得て、家族の愛と会合を得て、頭痛の種を得て、幼馴染みを失ってほんの少しだけ篠ノ之箒は強くなった――

アリーナに付属した管制室や整備壕（ピット）とも呼ばれる部屋に、モニターを注視する二つの影がある。
人影は山田真耶と織斑千冬だ。
「すごいですねぇ。お二人とも動くたびに記録を更新していきますよ」
「ああ、だが二人とも相手しか見えていない。自分が見えていないんだ。
――山田君、念の為救護班の準備を。おそらく決着がついた瞬間に二人共気絶……とまでは言わんが立ち上がれなくなるぞ」
真耶は喝采を上げ、千冬は辛辣な言葉と気遣いの指示を投げる。
ついでに千冬は、にやつく真耶にヘッドロックを振舞った。
小さな戦乙女達の剣嵐舞踏（ブレイド・アーツ）は、さらに加速と上昇を繰り返している。
篠ノ之……
千冬は少しだけ強くなった弟の幼馴染であり、自分の幼馴染と言ってもいい少女を見つめる。
意味は憧憬か、羨望か、悲哀か。
織斑千冬すらも分からない。

踊る。
躍る。
舞う。
飛ぶ。
撃つ。
討つ。
剣嵐舞踏の円舞曲（ワルツ）を躍る。
観客は何時しか拍手と歓声を上げていた。
教諭達は緊張した面持ちで見守る。

両者に勝敗の概念は忘却した。
只相手の上を征く事のみに身魂を尽くす。
戦う――
只相手よりも先に撃つ事に一心する。
闘う――
只相手よりも強く斬る事に専心する。
たたかう――
只、己が最強だと証明する為に――

紅と蒼がぶつかる。

空に灰の星が――

生命の安全がほぼ確実に保証された茶番のような決闘はこれにて。
続きましては第二幕。
これは金城鉄壁の鉄人形が、疲労困憊の紅鷹と蒼鷲を討ち取る鎧

袖一触の蹂躙劇である。

鉄の銅鑼を叩き割るような轟音が両者の間で鳴った。轟音が猛度と爆轟を伴って八紘を貫き渡る。

「――なっ！？」

「――きゃあ！？」

篠ノ之箒とセシリア・オルコットは発生した轟音と衝撃によって弾き飛ばされる。

ＰＩＣの制御によって地に叩き付けられるような無様は晒さなかったが、緊張の糸は切れた。

張り詰めた部位が崩れる。研ぎ澄ました戦意が折れる。

積み上げた心意の熱が揺れ瓦解し、極峰へ至らんとしていた武が転げ落ちる。

――二人の膝が花を手折るように折れ、今頃視界に霞がかかる。

武は続けられなくなった。

彼女等は武人から武器を持っただけの少女となった。

ＩＳもエネルギーが雀の涙程しか残っていない、罅入った鎧と同義と化した。

「何事だ！？」

責任者である織斑千冬の怒号が管制塔に拡がる。

「しょ、正体不明のＩＳがアリーナに進入。ええとそれから……ええ～！！？」

吃りながら小柄な一年一組副担任、山田真耶は報告、そして驚嘆。

「どうした」

「退避（ピット）整備壕の隔壁が作動しています。レベル４（最大値）！

このままじゃ篠ノ之さんもオルコットさんも閉じこめられて」

「何だとッ！」

アリーナの緊急時に作動するシャッターや隔壁が下り、乙女が舞う可憐な闘技場を哀れな子羊が獅子に喰われる檻へと変貌させた。
怜悧な美貌に汗が滲む。

それは紅椿に似て、しかし無機質な全身装甲（フル・スキン）のＩＳであった。
二メートル近い深灰色の巨体。
極端な猪首の頭には剥き出しの視覚装置（センサー・レンズ）。
極端に長い両椀には四つのビーム砲門が付いた重武装である。
〈ゴーレム？〉。
シールド突破の振動に震えていた装甲が止まる。

「――！」
「――！」
少女等は武威を感じなかった。
只、暴力的なまでの圧迫感を感じた。
それは意思のない人形に対して、人間が気味悪さを感じる――気のせいと呼ばれる感覚である。
そしてそれは自衛本能の無意識的発露であり、意思のない毒物や危険物に対して働く機能である。
危険を直感する。
襲撃者は、劇物のような暴威を解放した。

三者は虎である。
しかし健康な虎と創痍の虎二匹では勝負にすら成らなかった。
第二幕は蹂躙である。

蹂躙はあっさりと過ぎ去っていく。

そして始まる第三幕。

それはある種の奇譚であり、同時に新たな物語の始まりを予感させる鐘の音である。

第三幕は、現出である。漂流である。帰還である。

結論を言えば、空間に穴が開いた――

まず、聞いた。

歪みを与えられたモノが軋み、撓み、砕けようとする奇怪な音を。

だが、誰も彼も聞いた事のない音だ。

金属が歪む音でもない。

木石が軋む音でもない。

骨肉が撓み、砕ける音でもない。

何か（・・）、きっと何か得体の知れない普段意識も見もしない何かが歪んで出す音だ。

そして――

誰も彼もがそれを見た。

青息吐息の箒もセシリアもそれを見た。

管制塔の千冬も真耶もそれを見た。

逃げ遅れた見物人もそれを見た。

襲撃者もそれを見た。

何故か作動しない停止装置に業を煮やしていた篠ノ之束も電子の眼越しにそれを見た。

――黒だ。

渦を巻く黒が天井にあった。

蒼穹を遮る天井隔壁。

その手前に出現した黒渦。
大気を巻き込み、砂塵を蠢かせ、はっきりとした形で大人十数人が手を繋いだよりも大きい黒円が空中に描かれている。
ブラックホール――
宇宙物理学に詳しい誰かはそれを想起した。
しかしそれは絶大な重力で引辰の作用を働かせることはなかった。
不可思議。
不条理。
道理に合っていない。
宇宙物理学も地球物理学も混淆して、破綻して、理論と論理を超えた境に理がある。
しかし物事は思いに目もくれず進む。

やがて黒の中に白が顕れた。
白い点である。
白い点は徐々に大きく輪郭を変え、風斬る音を立ててアリーナの中空を貫く。
迅(はや)い――
秒速九・八メートル（重力加速度）の数倍、十数倍の加速力を得ているのか――怖ろしい速力で白の軌跡を描いた。
白の軌跡は地に砲弾のように着弾。
銅鑼を叩き割るかのような轟音が、本日二度目の轟音が、二人の少女を間近で叩きのめした。

「うわっ……！！？」
「きゃっ……！！？」
悲鳴を上げ吹き抜ける烈風と共に転がる。
互いの体をしかと抱きしめ合い、相手を守るように転がる。
その様は転落する虎のようであり、もつれ合う蛇のように体が交ざり合う。

そして爆心地より七メートル程離れた地点で二人は停止した。
黒渦は数秒前と同じように、最初から無かったかのように消えていた。
上には相変わらず忌々しい隔壁がある。
十数秒前からあった電波障害も急速に復旧した。

「へぇ、はぁ、ふぅん♪」
快活な女性の声が名無しのラボに流れる。
視線は超スローモーションで流れる白の彗星の拡大映像を見つめていた。
天災級の頭脳が記憶を再生させる。
再生再生再生――該当記憶再生。
再生情報を照合開始。修正修正――――完了。九十九・七九六九%一致――
「――――あは♪
……ちーちゃん、箒ちゃんあめでとう」

――――……お帰りなさい。

最後の呟きは音に成らず消えた。

衝突孔（クレーター）である。
爆撃された地面のように、アリーナの地面には浅く小さい衝突孔が空いた。
地面が盛大に掘り返されていた影響だろう、真深く土煙を上げる

衝突孔から、土埃の紗幕の中を何かが進み出でる。
靴音を静かに立て、着地の現実など微塵も感じさせない悠然とした足取りで進む。
雪を踏むかのような静々とした足音に襲撃者は砲門を向けた。
長すぎる右腕の四連ビーム砲門を輪郭が不鮮明な影に向ける。
衝撃に叩きのめされた筞もセシリアは反応を寄越さなかった。
管制塔の教諭陣も対応に追われる三年生の生徒達も思考が固まっていた。
人々が沈黙する中、無慈悲なビームが一条走る――

「――――」

雷の如き速度で疾走する熱線は、同じく神鳴りが如き大気の斬撃音に切り裂かれた。
物質ではなく熱エネルギーの塊であるビームは、物質である刃の前に霧散した。
――烈風が砂塵を払う。影が輪郭を得て、紡錘形の形を取る。
取り払われた砂の紗幕から顕れ、最初に目を引くのは幅三・五インチ、刀身三フィート弱の正統的な西洋剣だ。十字軍時代に良く好まれた十字架型の十字剣（クルセイダー・ソード）である。
柄頭には赤い石細工が鈍く輝（ひかり）を灯していた。
一フィートの柄を握るのは薄手の革手袋を履いた右手。白の紗幕からそれが伸びている。
白の紗幕はよく見てみると長い繊維が集まって出来ていた。
否、無機物の繊維ではない。
髪だ。
現れたのは白色の膨大な量の髪の毛である。
獅子の鬣のように前頭部から後頭部にかけて盛り上がり、揉み上げや前髪、後髪は長く足首まで垂れている。
蓬髪にしては整い、整髪にしては乱れがある。

また、遠目からは縁から飾り帯が長く伸びた編笠のように見える。髪が本体のようなヒトである。
そして当然の如く顔貌はほぼわからない。しかし傘からはみ出る肩は広く大きく、髪長姫が如き髪の主が大柄な男だということを誇示していた。
大柄な男である。
目分量で髪は二メートル強ある。盛り上がりの分と靴の高さを差し引いて男の身長は、一九〇センチメートルに迫る長身である事が窺い知れる。
その長身に覆い被さるように背負われているのは唐草模様の蒼古とした風呂敷包みだ。人間二人くらい入っているのではないかと思えるほど大きい。

……黒い穴から出現し、墜落死必死の高度から無傷で着地し、十字剣でビームを切り払い、毛羽毛現の如く膨大な白の毛量を湛えた長身の、おそらくは男と推測される、風呂敷を背負ったヒト。
情報だけを与えられた第三者はこう言うだろう。

――異常者（へんじん）、と。

そのように客観的に異常者と客観される男であるが、アリーナの当事者、箒やセシリアや千冬や真耶や逃げ遅れた生徒面々には別のモノが見えていた。
それは彼女等の主観である。
彼女等は白とは正反対のモノが観て、感じ取れていた。

黒々とした暗雲を孕んだ夜の鎮守の森――
砂粒一粒も余計な色も光も苔も蟲もない深淵の竪穴――
竪穴の底にある横穴の、封じる蓋として機能する岩戸――
決して開けてはならない扉を白髪に見立て、その奥に絶対の黒を

印象づけられた。
男は――黒々（むきゅう）としていた。
計り知れない無窮の玄（くろ）を纏い、孕み、醸し出していた。

鎮静制御。
丹田を軸に血の時計を回す。減速し散逸し乱編する。
熱量を偏位。必要箇所に必要量を。
築かれている機関に熱量が巡る。巡る熱量が手綱として機能する。
把握掌握流動駆動修正修正修正操作制御鎮圧鎮静冷却固定――成功。
暴走寸前の状態を制御し、鎮静することに成功した。しかし数週間の試験運転と研究により、機関と熱量の消耗は激しい。時空間跳躍は最低一週間は行えないと判断する。また、戦闘行動は短時間であれば問題無し。

状況を確認。
自堂（じどう）は攻撃を受けた。攻撃内容は多大な熱量と指向性を持った洸の束――ビームである。
死なぬ（・・・）が攻撃を即座に予見して防御に成功した。
しかし土地条件か時期条件か、自堂が攻撃され得る状況下に跳躍移動してしまったようだ。
自堂が不審人物として攻撃を受けたのなら無抵抗姿勢にて、拘束を受け入れる判断が望ましい。多少の暴行被害も罷む無し。
此処の所在が戦場であり、自堂への攻撃が流れ弾であったのなら自己の隠蔽及び逃亡行動が妥当と判断できる。地面は柔い。掘りやすかろうし、潜りやすかろう。
――兎にも判断材料が不足している。情報を蒐集する必要有り。

――――
――――
――――

この時間軸が、自堂が存在した後の時間軸かは、現在のところ不明。
同様に同じ理由で自堂が居なくなった世界軸か、現在のところ不明。
単独時空間航行移動（コスモス・ヴォヤージュ）の成功は不明。
同時間帯で跳躍したが、数年、十数年の誤差は出ているだろう。
世界確認は保留とする。
場所確認を優先する。
……競技用剣胄（レーサークルス）の競技場のように楕円上に観客席が配置され、退避整備壕（ピット）らしき入口がある此処はアリーナと論断できる。
闘技場（コロセウム）を思わせる土の地面に、残された無実体弾丸等による弾痕から訓練戦か実戦かは不明だが、戦闘状況に置かれている。
土埃は大分晴れている。身嗜みを整えるのは後にして、ビームの斜線方向へ顔を向ける。
……人形（ヒトカタ）である。命の気配はなく、ヒトの熱源も探知できない。
中には人はおらず、機構仕掛（からくり）けで動く自動人形の類である。
主武装は長すぎる両腕に装着された火砲が八門。多いが腕だけでは切り落とされた場合、丸腰になってしまう。

――推測壱、単独で作成。思うがままに作成と推量。
――推測弐、鬼札（ジョーカー）を伏せている。
――推測参、絶対に武装を損壊しない機構・自信が在り。

推測を脇に保留。注目すべき点を注目。――武器ではなく足。
……浮いている（・・・・・・）。
回転翼を使用せず空中静止している。足裏の燐光発する機関が浮

遊装置乃至推進装置、若しくは両方か。高度な文明の兵器である。
視線を左に向ける。
口を半開きにした惚けた表情をした少女達だ。
齢はどちらも十の半ば程か。東亜系統の黒髪の少女と北欧系統の金髪の少女だ。
馬尾結（ポニーテイル）の少女は武練に優れている。得物は二振りの刀だろう。信武両道の巫女と印象を得る。
毛先が竜巻、縦ロールの少女もまた武練に優れている。こちらは銃砲だ。狩りを嗜みとする英国貴人と感じる。
只、黒髪の少女については郷愁も感じている。知り合いだっただろうか……。
心情を保留にし、絡み合うように座り込んでいる少女等の様態を観察する。少女等が女色で常時の最中だったら平手を頂戴しても仕方がない視線だが、所在から判断するにその可能性は低いと判断できる。
――四肢しか覆っていない鎧である。急所を全く守っていない。また、脚部の甲は長く、爪先まで足が届いていない事が伺える。
歩けない。なれば此れは歩くものではないのだろう。機械人形と同じ科学（からくり）で移動するのだろう。

――……うむ？　これと同様のものを嘗て見たことがあっただろうか？
疑問を保留し、容態を診る。……衰弱である。酷い疲労状態にあるようだ。立ち上がる力すら残されていない。相手にとっては鴨打どころか、止まった的打ちである。
深灰色の機械人形と戦っていたのか、それとも別件で消耗したのかどちらかであろう。衣服と体内に保有する病原菌に留意し、医務室か病院機関に連絡を取ろう。
さて、まず何から手をつけるべきか――などと思考は愚考である。
機械人形を停止させるべきだろう。あれは彼女等も狙っている。

遠隔操作か自動操縦か、ビームの威力は大したものだ。装甲以外の法理で防御出来るとしても限界はあるだろう。そして限度を超えたから、少女等は立つ力も失っているのかもしれない。
方策は二つ。
言葉か兇器(まがきもの)か――観察を続けて判断しよう。

逃げ遅れた生徒達は遠目から見て肩を抱く。
間近で見た箒とセシリアは息を呑みほす。
真耶は怯えの感情を深く得た。
驚愕よりも黒に、闇に怯懦を得ていた。悪意も敵意も無い男に臆病者どもは立ち竦んでいた。
しかし、一人だけ違った反応を寄越す者がいる。
「……う」
織斑千冬である。
胸乳を押さえる。風によって髪に隠れた顔貌を垣間見たときから心臓が跳ね上がっていた。
男の行動そのものではなく、男の存在そのものが千冬の胸をざわめかせている。

解らない。
理解(わか)らない。
でも胸が締め付けられる。
そっとロケットを握りしめる。
中には破顔する詰め襟の少年の姿があった。
誘拐犯の車が事故に遭い、死体も発見されない死に方をした弟の写真だった。

織斑千冬という女の心情を余所に白い男は歩を進めた。
三メートル程上空を浮く深灰色のＩＳに向かって。
飢えた獅子に等しい存在へ、悠然と羊（男）は歩を進めたのだ。

男と襲撃者と少女等は二等辺三角形を描く点に位置している。
鋭角を描く頂点にいるのが襲撃者。同角の二点が男と少女等である。
「――？　……！　ちょっとおまえ、何をやっているんだ！？」
「――――何をしておりますの！？」
衝撃から復帰した言語発音機能が最初に行ったのは、男への注意だった。
当たり前である。
常人の道徳である。
生身の人間がＩＳへ挑むなど正気の沙汰を飛び越して狂気の中へ浸る行為である。
それを止める事に何の不条理も存在しない。
ヒトとして生きる上で当たり前。
彼女等は常識人である。
しかしそれが意味を持つのは、相手が常識の枠にあるヒトである場合のみ。

――やはりあれは彼女等にとって敵であった。そして近づく自堂に注意を勧告したということは、危険値が等比級数的に増大している。
そのように男は思考する。
《篠ノ之、オルコット、その男を止めろ！　――貴方もだ！　襲撃者から速く離れて下さい！！》
千冬はモニター越しに命を怒鳴り、男に避難を勧告した。男の素

性は知れないが、敷地内でＩＳによる無関係者の死者が出ては大問題以前の話である。
否、それよりも千冬は直感していた。
崩壊の予感だった。
この男の存在が自分という人間を完膚無きにまで揺り動かす。
壊すか癒すか――――それはどちらにでも取れる。
焦燥。そして恐怖。
それに千冬は支配されていた。

男もまた、ある感情に支配されていた。
噫――
この声は、貴方か――

痺れを得る。
震えを得る。
得たものは肉を動かさず、魂に染み渡る。
男は感に堪え黙々と進む。

セシリアも箒もある感情に支配されていた。
人を助けると言う人として当たり前の感情である。
セシリアは貴族の誇りを胸に、
箒は歩み寄りと頭痛の種を増やした姉に報いる為に、
人を助けようと動き出す。
酷使が過ぎてストライキを訴えている筋肉に力を入れ、無辜の――非常識的な行動を取る男性を捕まえようと動き出す。
そしてそんな男を長い右腕に備わった砲門を伸ばして襲撃者は射抜こうとする。

「――双方共、お待ち下さい。

漂流者が如き者が言う資格は御座いませんが、言わせて頂きます。
――どちらも矛を納めたし。斯様な仕儀になる前に良くお考えください」
嗄れた、しかし良く耳に通る古臭い口調がアリーナに流れた。
その音声（おんじょう）は、空気を濡らす色香を孕んでいた。

箒もセシリアもその声が何処から来たのか分からなかった。
長髪の白髪の男からだとは思えなかった。
髪の傘から伸びる擦り切れたズボンの足は何処まで続くのか分からないほど長く、同じように広い袖から除く肌を隠した腕も長く快活に動いている。
腰も真っ直ぐで足取りも肩筋も確か。
黒々としているが老人のように枯れてはいない。
白髪以外老人以外に見えない。
それが疑問の原因だった。
嗄れた老爺のような声を男が出したとは思えなかったのだ。
しかし事実、その嗄れ声は男のものである。
驚きを置き去りに、男は朗々と言葉を並べ立てる。

「……放送にて指示する御方へ具申します。
この少女等には最早、争う力も逃げる力も残されていないよう見受けられます。
故にこの娘達が立ち上がる事は無意味であると判断できます。
――犬死に、と呼ばれる行いに御座いますと当方は提案します」
正論である。
少女等には闘う力は残されていない。
此処で動いても少女等は更に酷い状態になるかも知れない。

《そんな正論を話しているのではない！　貴方の身の安全を確保しなければならないのだ！　――だから貴方は二人と協力して逃げ回って下さい！！》

正論である。

教師としてもＩＳ操縦士指導者として常識人としても常識的な思考である。

男は女より弱い。

男はＩＳを使えず、ＩＳに抗う事は出来ない。

だからこの白髪の男は逃げなければならない。

人々の正論による議論を他所に、無人機はビームを放つ。

それは空間を走り顔の横の空間を貫き、地面に土飛沫と水蒸気を生み出すだけに終わった。

外れた。束謹製の無人機（ＩＳ）が外した。

「我が身の御配慮に、放送する貴方とそこの少女達に感謝を。

――――それに自堂（じどう）への心配は御無用に御座います」

眉一つ動かさずビームを見送った男は、ＩＳに狙われた男はそう言い捨てた。

男について何も知らぬものが聞けば凶気にしか聞こえなかった。

凶気である。……兇器を持っている。

そして無人機が攻性状態を止めぬ事を判断するやいなや、武装放棄の言葉を慎み、荷を少女等に放り投げ、前方を向けて右の手刀を放った。

兇器（まがきもの）を振るう者は、争いに飲まれるが運（サダメ）。

自堂は其れを受け入れる。

善悪全てが混ざった仕儀を飲み干す。
銘(な)を呼ぶ。
解凍文句(パスワード)を入力する。
創甲の仕儀を実行する。

「織鐵(おりがね)」

――埒外の、常識の外の、条理の沙汰の跳躍した事象が生じた。

……ありえない。

篠ノ之箒は埒外の事象を見ている。
膨大な量の白髪から体積を減じることなく膨大な量の白絲が溢れ出る。
絲。
弦。
紐。
繊維。
絲の洪水が髪から生じ、布地を叩くような音を立てて地面に広がっていく。
やはりあの男、化生か何かだったのだろうか。
蜘蛛の化粧。
男の女郎蜘蛛の類だったのか。
私は今、狐狸に化かされているのか――
「此(これ)はα（アルファ）にしてΩ（オメガ）である」
右手を心臓の上に当て、装甲ノ構(ソウコウノカマエ)を取り、誓約の口上を述べる。

……ありえませんわ。

セシリア・オルコットは常識の外の事象を見ている。
絲の洪水が宙を舞い、形を織り上げている。
見えぬ織機が糸を織り上げ布を作り、布を合わせて分厚い布地を造っていく。
形状は六角形、長方形、紡錘形、紐状と様々だ。
それらは全て多種多様の物質の超極細甲鉄繊維が集合した甲鉄である。

籠手の。
脚甲の。
肩甲の。
胴丸の。
面頬の。
札(さね)の。
袖の。
兜の。
角の。
筒の。
――鎧冑(まがきもの)の甲鉄(そざい)である。

「其(それ)は色(しき)にして空(くう)である」
心臓を掴み出さんばかりに力を込め、隠された顔で武を振るうに相応しい禍き笑形を作る。

……ありえんだろうこれは。

織斑千冬は条理の沙汰が跳躍した事象を見ている。
それはＩＳではない。

男である以前に、世界で五〇〇余りしかないコアが作るＩＳには、かの如き展開方式は無い。
絲を織り上げ布を作り、布を合わせて装甲と成すなど、何処の政府も会社も採用しない。
無駄。
不条理。
しかし実際に行なって、一つの兵器を生み出そうとしている。
舞う甲鉄の花弁。
綺羅綺羅と表面は輝き、銀細工めいた輝（ひかり）を纏っている。
中心には、白の紡錘形の影を作る黒の男。
そして最後の口上を詠み上げる――

「ツルギの輪廻（ながれ）、此処に在り！」
打ち出す右の拳。
集まる甲（はがね）の花弁。
一領の劔冑。
一人の人間。
合一し、顕れるは白色（びゃくしき）の鎧士（かいし）。

「当方織鐵。一身上の都合により貴方を停止させて頂く」
深灰色の機体へ向かって合当（がったり）理に火を入れた騎体（織鐵）は、猛烈な邁進を開始した。

第三幕は終了。
続く第四幕。
ＩＳ（インフィニットツルギ）と劔冑（ラトス）。
この世界の最高兵器と別の世界の最高兵器が激突する。

――白の合当理が赫奕迸る炎を上げる。
「――――」
百の餓狼の唸りにも似た排気音（エグゾーストノート）が上昇（のぼ）る。
白の星は竜蛇めいて狡猾に。
灰の星は機械めいて単調に。
咆哮がアリーナを叩く。
無機質な運動音がアリーナを渡る。
白色の武人は合理主義の兇法にて剛剣を操り、
灰色のＩＳは自動操縦の合理にてビームを放つ。
戦場の熱が感じ取れない寒々とした戦闘。
怒りも、慚愧も、無念も、悲嘆も、
喜びも、慰撫も、許容も、愉悦もない。
第四幕――
この日最後の一幕は、最初に習って決闘か。
否。
そうでは、ない。
これは闘争ではない。
比べ合いでもなく、競い合いでもない。
眼の前にあるものを壊して安全を取る、矛を使った只の危険予防。
白に敵意と殺意はなく。
灰に害意と戦意はない。

双輪懸を巡らせない武の様相は、月の魔物と鮮血の鬼の睦み合いによく似ている。
されど、武の妙境に立っているのは、強者は一人輪を描く白である。

やがて白色は灰色と共に地へ落ちる。
少女等の身の安全を考え、肘関節を取ったＩＳごと地へ落ちる。
推力の勢いと重力の加護そのままに猪頚の頭を地へ叩きつける。
土で不揃いの目と言う特異な顔型を取らせ、白色は右肩に担いだ大剣を抜き放つ。
広く、分厚く、大雑把――正しく鉄塊とも言うべき西洋大剣を、樋（フラー）が走った刃腹を腋に通して地に突き刺し、――構えを取る。
子供の戯れにも劣る、刀刃の扱いを知らぬ愚物が如き構え。
されどこれは構（カマエ）なり。
必殺の武威を解き放つ兇儀なり。

横線が眼と口元に走っただけの素っ気ない無貌面の下、薄い唇が、一節の詩を唄った。

「輻暴抜刀（ホロウコースト）――――――“嚇（アカラ）”」

それは正しく大地の嚇怒（いかり）。
それは正しく明王の瞋恚（いかり）。
救うに価せぬ愚衆を烈火渦巻く降伏の剣にて屠り去る不動尊の正義。
地にも残さぬと千切り散らす、明王の降伏法（あくぎょう）。

大地を鞘に、
爆音と言うのも生温い轟音を加速推進力に、
ゴルフのショットのように刀刃は下から上へ白三日月の弧を描き、
ＩＳの脇腹をかち上げる。
深灰色のＩＳはその機体を半分以下に圧縮され鋭い三角形のような形状に変わり、水蒸気爆発と超高温の摩擦熱を纏って天井シールドを突き抜けて、遥か天空で爆裂した。
敵機の爆裂から逃れた少女等は、膨大な土煙の飛沫を浴びて盛大

に咳き込んでいた。

この日の舞台の演目は、決闘、蹂躙、帰還――そして予防。
この日の舞台はこれにて終了。
続きましては幕外（アンコール）の話。
再開の幕、である。

肉膚が甲鉄と別たれ、埒外の事象の逆回しを行なった男に少女等が詰め寄る。問い詰める。
「おま……貴方は一体何者なんですか？　それにどうやってＩＳを？」
箒は中途で丁寧語に変え、疑問をぶつける。
「右に同じですわ。あんなＩＳどの会社も政府も開発しておりませんわ！　いえ、それ以前に男に使用はできないはずです。……それと感謝も」
セシリアも詰問を飛ばす。命を助けてくれた感謝と男性蔑視が混同している態度だった。
両者とも襲撃者が消え去り、男に清潔な手拭い越しに手を取られて立ち上がった数秒で元気を取り戻していた。
溜まりに溜まった乳酸も切れた筋繊維も疲労感もどこかに消し飛んでいた。
自分等より遙かに大きく、黒々とした男に対して興奮が後押ししているだろうが物怖じせず姦しく問いを飛ばす。
渡された手拭いで顔を拭くのも忘れている。
男は黙って声を浴びている。
少女等には見えないが顔色は悪い。熱量を消耗し過ぎた所為であ

ろう。しかし、口に出すことなく、
「至極当然の疑問と存じます。しかし今は御遠慮頂ければ幸いです。自堂が疑問の解を差し上げる相手は貴方方ではなく――そちらの方、責任者と状況判断できる御方です」
と、疲れを見させず、髪に埋もれた口が至極丁寧に真っ当な論理を述べ立てる。
視線は漸(ようや)く檻から常へと戻ったアリーナに、大急ぎで駆けつけた織斑千冬に向けられている。暫(しば)し遅れて山田真耶も駆けつける。奥には生徒の姿がちらほらと見えている。
確かに状況説明すべきは生徒よりも教諭である。
至極常識的な判断であったが、千冬は常識に従わなかった。
「――――顔を、顔を見せてくれ！」

嗚咽にも似た懇願だった。
願っていた。
織斑千冬は自身の全存在を賭けて希っていた。
そうであってほしい、と。
違うこんなのは違う、と。
相反し、矛盾する希求。
「織斑先生……？」
真耶は視線を同僚に向ける。訝しげに、そして気遣うように。
「織斑先生……？」
「先生……？」
箒もセシリアもまた厳格な先生の態度に眉を顰め、そして気遣う態度を諮りかねていた。
「お願いだ……。顔を、顔をはっきりと私に見せてくれ。
織斑一夏の姉である織斑千冬に見せてくれ……」
声の最後は萎む花火ように消えていった。

男は幾秒かの黙考の末、――――右手を前髪に伸ばす。
千冬はその所作をじっと見つめる。
「諒解。自堂は貴方の希望通り行動を示します」
右手が動く。白の紗幕を取り払う。
右手が前髪を後ろに撫で付ける――――

貴方は何と言うだろうか。
貴様は誰だ、と誰何の激を飛ばすのであろうか。
それとも自堂の名を呼ぶのであろうか。
嘗て貴方が呼んだ通りに……。
全ての可能性を受け入れましょう。

そこに奈落があった。
誰もが感じた。
人の顔ではなく、悠久の底を見せる無明の深淵があると感じた。

典型的な東亜系黄色人種の肌である。
幾つか擦過傷や創傷の痕らしき痕跡が頬や額に見て取れた。
年頃は若く、二十歳前後と言っていい肌艶である。
美形である。
十分に二枚目と言っても良い造形だった。
髭はなく、力強い輪郭の顎が細い頬に繋がっている。
鼻筋は整い、固く結ばれた薄い唇が実直な印象を与える。
眉目の毛は髪と同じく白で、短く揃えられている。
人間の顔である。

厳しい張り詰めた凶相でもない。
しかし奈落である。
瞳だ。
黒の眸。
そこに闇(ひかり)があった。
陰気や邪気などの胸が悪くなるような光はない。
只、宇宙のように、夜のように深淵(ふか)過ぎる黒があった。
見つめると自分が広大無辺の闇のただ中に取り残されているような気がした。
見つめると自分が無音無明の闇の中を落ち続けているような感覚に縛られた。
宇宙の闇全てを一点に凝縮すればこのような闇の結晶ができるかもしれない。
底が無い（・・・・）。
こんな目をする人間がいて良いのか。
顔を見、すぐに逸らしたセシリア、真耶はそう思った。
髪は窓であった。
黒の底を少しばかり覗ける窓。
入力される情報を抑える防火壁(ファイヤーウォール)であった。
まともに見てはいけない。
見れば宇宙的恐怖が襲う。

箒は数秒の記憶を再生する作業を持って、正体に辿り付いた。
「――――ひぃ！！？」
千冬は見た瞬間に正体へ辿り着き――――激しく嘔吐した。
「――――う、ぐべえぇえあああァ」

――――ああああああああああああああああああああああアア

アアアアアアアアアアアーーーーーーーーーーー！！！！！

何故！！
何故だ！！
何故お前がそんな顔をしているんだ！！！

お前のそれは眼じゃない。
人の器官ではない。
穴だ！
闇だけがある、底無しの穴だ！

弟よ！　お前の魂はどこにある！
弟よ！　お前の心はどこにある！
弟よ！　お前はどこにいる（・・・・・）！

返してくれ。
還してくれぇ。
弟を返してくれ！

チフスに犯されたかのような激しい吐瀉だった。
珈琲によって黒く染まった反吐が地面に落ちる。
厳格な教諭の突然の変貌に皆沈黙した。
突っ伏し激しく咳き込んでいる千冬の背に手を当てる者がいる。
白い男だ。黒き男でもある。
もう片方の手を肩に当て、顔を上げさせる。
夜色の瞳が閉じられ、目礼する。
反吐に汚れた口元を手拭いで拭き取る。
動作一つ一つどれをとっても慈しみ、そして身内への親愛に満ち

ていた。
箒、セシリア、真耶の三人はその情を感じていた。漸(ようや)く男がちゃんとした人間に見えた。
拭う手拭いを押しのけ、千冬は鍛えられた胸板へ抱きついた。
男もまた――それに応えた。
抱擁。

「あっ……」
「あらっ」
「えっ？」
三者三様の驚愕。遠巻きに見ていた生徒も黄色い歓声を上げる。

それは当たり前の行動であり、衝動である。
再会には抱擁が付き物だ。
髪にくるまれながら千冬は青息吐息で言葉を紡ぐ。

――――――一夏。

織斑一夏は、はい、とだけ応え姉を強く抱きしめた。

――自堂を失った貴方の下へ、自堂は只今を持って漂流し帰還しました。

この日の四幕と幕外の物語はこれにて終了。
続きましては番外編。

この時、その時、あの時の物語である。

「世界から飛ばされた流れる希望。
世界から捨てられた彷徨う怨嗟。
――さて、どっちだ。どちらだ？」
若人は歌を吟じるように、千里離れた孫娘にも等しき少女へ話しかける。
《別世界から流れた漂流者は人間であり、
この世界に棄てられた廃棄物は人間ではない。
あの人たちは、あのおじいさんたちは――人間だよおじいちゃん（・・・・・）》
下の句を吟じるように少女は応えた。脳を刺す金打声は明確に喜びを含んでいた。
「――ほう、何故思う。師匠から問題だ。――何故思うか、理由を述べよ」
逡巡もなく少女は述べる。
《彼等は狂っていない。彼らは壊れていない。
何人も何人も狂ってしまった人々を“見た”私がいうんだよ。
何人も何人も壊れてしまった人々を“識った”私は断言するんだよ。
彼らは〈漂流者（ドリフターズ）〉だ――》
烈火の如く意気を込めた言が男の胸中に充ちる。
「……よし、説明するんだ。彼等の立場を。
説得するんだ。この世界の力になってくれる事を」
《うん、でも……》
「どうした？」
《もう一人の方と喧嘩中、あっ装甲したよ。う～ん、どちらも顔見知りかなぁ？》

「……止めよ。彼等をまだ、民たちに見せてはならぬ。彼等の武を損なわせてはならぬ」
《うん――征ってきます》
快い戦気により通信は切れた。
男は青々と輝く左目を掌で覆う。
「早く何とかしないと。でないと――本当にこの世が滅んじまうぞ」
右目には激しく神秘的（オカルトチック）な手段で撮られた写真。
――襤褸切れを纏った闇の虚（ウロ）が其処にある。

「踊る。踊るだわさ」
逆立った髪型の奇抜な陰影（シルエット）を描く人影が踊る。
「回る。回る。運命は回るだわさ」
端麗な顔立ちの男（？）が廻る。
「東方も西方もＩＳの扱いに天手古舞い」
歓喜を込めて人影が舞う。
「おまけに漂流物（ドリフ）も廃棄物（エンズ）も劔冑（クルス）もぶっこまれてしまってさぁ――」
喜悦を含んで人影が躍る。
「おまけにあの道化も帰（き）還たからにゃあ、この世界もいよいよかもしれないにゃ――」
停止。
道化の様に笑っていた顔が厳粛に絞まる。けばけばしい化粧と紅の唇には微笑。
「……よくぞ還っ（来）た、道外（どうけ）よ」
仄かな嬉しさを込めて伯爵は吐息する様に呟いた。

――面白い。ああ、面白いなあ面白い。
人生五十年すぎてまだまだ面白いことがおきやがる。
足りねぇよ。まるで足りねぇよ。五十年如きじゃあ下天は夢幻になりはしにゃあ。
クヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒ――

「――まだ劔冑は生きている。一応手当てしてやれ。運が良ければ生き延びるだろう」
うわあごっそりと胴丸が抜けてやがらぁ、よく心鉄が無事だったなぁ。あ？　鞘はあっても太刀がねぇや。落としたのか。
「コイツも飛ばされてきたんだろう。儂等と同じようになぁ。ふふん♪」
さあてコイツはどこの誰ぞ。劔冑は古甲だが、短筒持っとるし、当世の武者に間違いないだろぅがな。
話はあとだ。
ああ、楽しみだ。面白ぇことが待ち構えてやがる。
これで三人ぞ。
劔冑の数が余っているな。
あと、一人くらいこねぇかなぁ――
ああ――楽しみしかねぇ――

「――――面白きものよなぁ、この浮き世は」

――これは英雄の物語ではない。
漂流し、帰還した道化の物語である。

TO BE CONTINUED.

序編／紡剱騎（後書き）

拙作を読んでいただき有難うございます。
彼の過去については追追書いていくつもりです。
主要登場人物の性格などの変化については、織斑一夏がおらず、周りとの付き合いで変化していったものとしております。
帰郷編はインフィニット・ストラトスと装甲悪鬼村正のクロスオーバーです。
ドリフターズとのクロスはまだ先です。
また、ドリフターズと装甲悪鬼村正のクロスでもあります。
※追記：章分けするにあたり、内容を変更。ご了承ください。

第一編／Clown Of The IS Educational inst

章分けしました。投稿していた小説の切り張りです。

テレビがある。
受信する放送電波はニュースだ。
『――……にＩＳ学園での学校行事の最中に、学園に属さないＩＳによる事件が発生しました』
朗々とキャスターは、国内法が適用されないＩＳ学園での事件を報道している。技術情報開示の規定はあるが、秘匿されるべき情報や隠さなければならない情報は多々ある。
しかし教育機関であり、世界中から集まった優秀な子女達を多く有する学園での事件である。保護者や関係者への説明、またマスコミ等への情報提供も行わなければ機関として立ちいかない。
『加害者であるＩＳ・は、専用機持ちの生徒の手によって応戦を受けました。また、加害者のＩＳが用途および目的は不明ですが、連れてきた（・・・・・）と疑わしき男性も保護されました』
事実ではない。
しかし嘘ではない。
加害者側のＩＳは、専用機持ちの手によって少々のダメージは負った。
男性が現出した理由と原理は不明であり、不明だからこそ加害者が連れてきたと言う真実がある可能性はある。……限りなく少ないだろうが。
『最終的に加害者のＩＳは撃墜され、深刻な損傷を負ったようです。』
謎のＩＳについてキャスターはこれで締めくくった。
続いて次の原稿に目を通す。やや興奮の色が唇に乗っている。キャスターとしての食指に触れる原稿なのだろう、さらに朗々と報道する。

『学園に保護された男性は〈イチカ・オリムラ〉と丁寧な礼節で名乗り、ＩＳ委員会、警察などで男性の身元の証明を行なっています』
キャスターの右上に少年の写真が添付されている。詰襟の少年が写った写真だ。下には織斑一夏とテロップが添付されている。
あの白髪の青年である織斑一夏の写真ではない。
青年織斑一夏（彼）を少年織斑一夏（彼）とする証明はまだ論断されていない。
『一夏君は中学生の頃に行方不明となり、また行方を暗ませた日が第二回モンド・グロッソ決勝戦の当日であり、実姉の織斑千冬選手は不戦敗となっていたため関連性が疑われていました』
キャスターは表向きの行方不明事件の情報を朗読する。
裏向きは誘拐事件であり、行方不明となった経緯は犯人しか知らない。
ただ、ドイツ軍が独自の情報網から情報提供したが、特定場所に一夏は居なかった。誰一人、猫の子一匹千冬は見つけられなかったという。
ドイツ軍は再度調査して誘拐犯の物と思しき車両と死体が海から発見された事を報告している。また、ドイツ軍や警察機関も千冬自身も何度も海中を捜索したが何一つ遺留品等や証拠物は発見できなかった。
タイヤ跡の残る道路には、乾いた夥しい涙の跡だけが残された。
『しかし疑いだけで、証拠は何一つ発見されていません。行方不明となった理由・原因は依然として不明のままでした。もしも〈オリムラ・イチカ〉と名乗る男性が一夏君本人だと断定されるなら、事件は一気に解決へ近づくと思われます』
締めくくり、『織斑一夏君発見（？）！！』のインタビューが放送される。
母校の学校関係者や交友関係があった友人へのインタビューが流れている。

先生や友人も、もしも本当に彼だったらとても喜ばしいと好意的な話を述べている。特に定食屋の兄妹は、泣き喚きながら会いたいと主張していた。
ＩＳ学園と織斑一夏らしき男性の報道は終わり、海外のニュースが流れている。東南亜細亜で出没していた海賊が、三人組の天の御使いによって討伐されたと奇矯で眉唾なニュースが流れている……。

私はテレビの電源を消した。プチっと音を立てて天使がアジアでどーたらと言っていたテレビは黙り込む。
「……」
ベッドに飛び込む。ボフっと毛布とクッションが私の体を受け止めて柔らかい抵抗が顔と胸を押す。
頭はモヤモヤとしていた。
「……一夏」
名前を呟く。あの日から一度も呼んでいない名前。
呼ぶと元気な声で返事して、ニカッと笑ってくれた。
行方不明になったと聞いたとき目の前は真っ暗になった。
父さんも母さんもあの時ばかりは二人一緒に慰めてくれて、それで――うやむやになっちゃったんだよね離婚。
あんなに喧嘩していたのに、娘が落ち込んでたら二人して心配して、元気になったら二人して笑いあって……。
娘（私）のわからない理由で離婚寸前まで行って、娘（私）のわからない理由でまた仲良くなって……ほんと大人ってわからない。
だけどたぶんタイミングがよかったんだろうな。
相手じゃなく娘に目を向けていたときだったから慰めてくれた。
奇跡や祈りの果てに願いが叶ったとかじゃなくて、単なる偶然。
そして一夏がいなくなったのも偶然の事故。
……。

父さんと母さんはそのまま中華料理屋を続けている。
私は一人、中国に渡って軍に入って専属操縦士（パイロット）をしている。
軍の人は、私が一夏と言う男の子の幼馴染だからか色々と聞いてきたけど、答えられることはあまりなかった。両親にも聴いてきたらしい。両親も同じようなものだった。
よく、家（うち）にご飯を食べに来た娘の思い人――そんな記憶と認識しかないでしょう。
見返りとしてＩＳ学園に来た男の人の情報を教えてもらった。
背の高い、髪が白くて長い、夜空のように黒々とした男――らしい。
なにそれ。一夏の容姿じゃないわよ。
でも、二年近く経ってるものね……私も色々と……まあ、あちらこちらがチラホラと成長したかんねッ！
だから容姿が大人のようになっていてもそれは健全な成長だと思う。そんな大人の体になった一夏を、一夏と私はどうしたいんだろう。
喜びたいのか、彼の身に起きた何かを嘆いて喚きたいのだろうか。テレビに映っていた弾や欄みたいに泣き喚いて見ればいいのか。
悩んでても会えない。彼はＩＳ学園にいる。治外法権で厳重な警備の敷かれている学園に。

ＩＳ学園……入っとけばよかったなぁ。
一夏を見れて、もしかしたら会えたかもしれないのに――
――――……？！？

「――……そうだ。入ればいいんだ」
ベッドに立ち上がる。結んだ髪が活気に動く。
私は中学を卒業したばかり。おまけに専属機持ち。試験なんてあっという間に突破してやる。
決めた。ううん、決まった。

私はＩＳ学年一年生よッ！
「――待っててなさいよ一夏ぁ！」

そして――ＩＳ学園で私を待っていたのは、僅かな面影以外全てを無くして、全てを失って、全く別の存在になった幼馴染だった。

創甲道化織鐵
帰郷編
第一編／Ｃｌｏｗｎ Ｏｆ Ｔｈｅ ＩＳ Ｅｄｕｃａｔｉｏｎａｌ ｉｎｓｔｉｔｕｔｉｏｎ

日本に一つの特殊国立学校がある。
ＩＳ学園だ。
ＩＳ学園はアラスカ条約に基づいて建築された、ＩＳを使う人材を育てるＩＳ学園――正式名称ＩＳ操縦士育成特殊国立高等学校である。
この学園はあらゆる国家機関に属さず、如何なる国家や組織からの勧誘は一切許されないという治外法権の立場にある。
その規律はほぼ有名無実であるが、規律は規律。罰する法が働き、それが抑止力となって学園の生徒や教諭達を守っている。
法と抑止力という名の壁に囲まれた安全地帯である。
ＩＳ学園は学校として機能する為の施設に恵まれている。
ＩＳ操作練習の為のアリーナなどがその最たる例である。
また、学生寮も職員寮も設備に恵まれ、国立の資金の潤沢さを伺

わせる。
職員寮の使われていなかった一室に、二時を過ぎているというのに明かりが灯っている。
誰かが机に向かい、白い紙に向かって作業をしていた。
織斑一夏だ。

シャープペンシルの尻を押し、芯を出す。一定の長さに調節し再び描き始める。
芸術性は無い仕儀。単調に筆を走らせ記憶を紙面に記録していく。
描いているのはあの世界の情景だ。写真には撮っておらぬ風景や人物等を自堂は描いている。
ヒト、建築物、動物、そして劔冑――
黒白（モノクロ）の線と面であの世界の一部が出来ていく。
黒白の色で美行をするヒトが、醜行をするヒトが出来てゆく。
黒白の輝（ひかり）で荘厳な真打劔冑や水中戦仕様の数打劔冑が出来上がる。
時計の針が奏でる音（ね）と筆と紙が生み出す律（リズム）が部屋を満たす。
描き刻まれた紙面の数は六十を超えた。
――と、鳩時計の音にも似た時計の電子音が鳴った。確認すれば長針と短針は五時を指している。切り上げどきか……。帰還（かえ）りついてからの病原菌消毒、病院機関での検査、事情聴取等で慌ただしい日々を過ごしている。休憩時間を戴いているが、全て細々とした作業と身辺整理に使い消費している。
写画の儀も作業の一つであり、並列別（あちらがわ）世界の存在を証明する材料である。あちら側にだけある〈劔冑〉、〈金神魔王尊〉そして〈悪鬼〉――
思考、発想、決断。
その思考は脈絡も無い閃きである。心の身辺整理の意が強いだろ

う。
記憶再生。そして実行。
描く――
描く――
描く――
紙面に出来たのは写画ではなく、心を込めた絵画。記憶を掘り起こす所作は同様だが、此れには魂を入れている。仏を打つ仕儀に同じ。
彼等の魂を輝かせる。
彼等の在り方を刻み込む。
彼等の自堂から見た印象を描き上げる。
……。
……。
……。
――終了。
シャープペンシルと山田教諭の御好意で頂いた色鉛筆と色筆で良いモノが仕上がった。
広げた感覚の手が触った。触れられた。
自堂に明確に目的意識を持った人物が接近している。

当方織鐵、一身上の都合により貴方を停止させて頂く、と彼は言った。
この世の万物が溶け込んだかのような漆黒の気配を湛えながら。
織斑一夏、漂流者（フライングマン）として宇と宙の境を越え、只今帰還いたしました、と弟はいった。
抱きとめた私にだけ聞こえるよう、深淵の底の底のような双眸から慈しみと敬いの心地を向けながら。

嘔吐臭が漂う中、姉（私）と弟は久方振りに睦みあった。

そして言葉の深い意味（ニュアンス）を考える間もない程、慌ただしい日々（一週間）が過ぎ去った。

何一つ、私は弟の過去について聞けていない。

何一つ、弟が成り果てた過去を知り得ていない。

食事中も休憩中も聞く機会はあった。

だが……聞けなかった。弟も何一つ言わなかった。

そしてどのような場所でも状況でも、あの黒い気配は微塵も変わらなかった。

誰に対しても丁寧な敬意と礼儀に満ちた口調と言葉で応じ、

誰に対しても奈落の底の底の闇を湛えた態度と混沌で応じた。

悪意や害意や敵意や邪気や陰気がない――ざっくりいってしまえば僧侶のように精錬な人となりだった。

悪意や害意や敵意や邪気や陰気がないにも関わらず――平たくいってしまえば世と人々に悲観し、絶望しきり、身の毛のよだつ罪を犯した悪人のように暗黒としていた。

「……」

おかしい。

おかしすぎる。

何一つまともな人間として行動や人格を逸脱していないのに、何一つとしてまともな人間の雰囲気とは感じられない。

時折向ける情愛や敬意や好意は心地よく暖かいが、黒い気配はこゆるぎとしない。

不動の暗黒星。

いったいどんな精神構造しているんだ一夏（おまえ）はっ！

――と叫べば楽だろう。問い詰めれば楽だろう。

だが、精神科医や心療科医が拒絶した――彼らの名誉の為に注進しておくが、職務放棄や医師魂の投棄ではなく、人心を誰よりも知るが故の自然な逃走である――精神性だ。

迂闊に踏み込めば、弟の心がよりひどい状態に傾くかもしれない。壊れるか、狂うか、それとも何もからわず訥々と問いに答えるか……。

どれになっても私の心は深く傷つき、揺れるだろうな。

「ふう……」

「大丈夫ですか、織斑先生」

「――ああ、いや――ああ、大丈夫だ。何も心配はいらない」

「……それならいいのですけれど……」

言葉じりは納得していないことを匂わせていた。すまないな山田くん。

階段を上り、廊下を進む。目的地（へや）からは気配がしていた。意識しなければ分からない感覚。直感が示すのはひとつの行動。――起きている。

私は扉をノックする――前に内側から開かれた。

歩調と靴音で誰が来ているかは認識している。二名――教諭二人。御手を煩わさせる前に開く。真っ先に目に入るのは上背の高い女性――

「――御早う御座います。織斑教諭殿に山田教諭殿。

……毎朝御手を煩わせる自身に恥じ入り、穴があれば入りたい心地に御座います」

低頭礼にて出迎える。髪の房が板間に垂れ渦をつくる。個人では身動き取れぬ不法侵入者にして行方不明からの帰還者である自堂。不可抗力とは云え、教諭であり公（おおやけ）に仕えている者達をこうまで忙しくさせる自身の星を恨みたくなる。

また、学び舎では姉御前は教諭――教育者である。身内の血に乗じて馴れ馴れしく名を呼ぶのは憚りならん。

「……もう少し謙虚な態度を変えてみてはどうだ？」

「わっわっ、顔を上げてください一夏さん（・・・・）。私たちのお仕事はＩＳ学園でのＩＳに関する教授と指導と事件・事故の調査なんですから」
　労りの言之葉。
其の優しさに益々身が縮む思いである。座標を地面の中以外に指定することに精一杯で、他に計算が間に合わなかった自身の非才に恥じ入るばかりである。
「御厚情有難う御座います。しかし礼節を尽くすべき相手に尽くすのは不徳とは想いません。また、貴方方は礼節と敬意を捧ぐヒトと想います。次いで手妻（これ）を捧呈（ほうてい）致します」
　立て続けに申し上げ、さらに恭しく紙の束――写画の束を捧呈する。
「……ああ、確かに受け取った。それとこれを返却しておこう」
　返答と共に紙束を受け取る。入れ違いに長い棒状の物――見紛う筈も無き、形見の剣である。丁寧な手妻で藤色の布に包まれた其れを返却される。
「拝領」
　低頭、両手を伸ばしアゾット剣を受け取る。
　山田教諭殿は視線を自堂と姉御前（あねごぜ）を往復する。動揺と興奮の呼吸と微々たる発汗をしていた。御迷惑をおかけします――
「そ、それじゃあ織斑先生。一夏さん。朝食に行きましょう、ネッ」
　山田教諭の号令に従い、自堂等は朝食を求めて姉御前と山田教諭を先頭に並んで歩き出す。腰元で鞘と革帯の金具が鳴る。
「そうだな。――ん？　これだけ色付きか」
「――はい。思い入れが有ります故」
　姉御前の手元を見る。必然的に黒の布地に包まれた胸乳（むなち）でやや見え難い。
　同世代の女性よりもやや硬さと厚みを持っているが繊細な印象を与える手が紙面を捲る。

――無頼の仁術家。
――鮮血の貴婦人。
――そして、装甲悪鬼。

誰も彼も縁を結んだ三名だ。紙面の中で輝き――仁、美、禍を醸し出している。こればかりに関しては中々の手妻だと自負する。
「お上手ですね、一夏さん」
視線を確認する。輪郭から外れた眼鏡は如何な使用目的であろうか。黒白の写画を見ている。普陀楽山塞だ。
「些細な手妻に御座います」
「謙遜しなくたっていいんですよ。美術の成績良かったんですか？」
その瞬間である。空気が変じたのは。

――問いだ。
只の問い。しかし失態を悟った眼をした。姉御前が責めるような、悲しむような視線を同僚と自堂に向ける。目礼にて返答。身をやや屈め山田教諭と目線を合わせる。
鏡面遮光眼鏡越しに、小柄な愛々しい教諭の姿を目にする。
「はい。絵画の仕事にて些細ながら収益を得た経験が御座います」
画家の小間使いであるが。絵皿と作業着を洗った以外教授された憶えはない。
「……へ～凄いですね。私が絵を描いても一円にもなりませんよ」
「御謙遜を」
「いやいや、本当ですって」
山田教諭は愛想笑いをしながら肩を落とす。
如何(いかが)したものか。
臆病だが、身分は分かっていても女学園であるＩＳ学園では完全に不審人物である自堂に対して柔和温順に接する山田教諭殿は、敬

意を向けたい女性(にょしょう)である。
落ち込んでいる。如何なる儀で笑顔を取り戻せるか。……――小粋な冗句かッ！
世が換わり、普遍意識(じょうしき)が変われば、かつて埃及(エジプト)の砂原よりも渇ききった空気を生み出した冗句も、熱帯雨林が如き暑く明るく湿った空気へと変成させしめる効能が有るやもしれん。
だが過信は禁物である。自堂の諧謔の才能(センス)が教諭の琴線に触れなければ、只々無様な道化姿を晒す羽目になる。自堂の無様さは無問題だが、山田教諭の落ち込みがさらに底を抜けようものならば素っ首吊り下げても償いきれぬ！
あちらの世の徳と罰が報(むく)えぬ今の身の上だが、こちらの世でも罪(と)科(が)を重ねると考えると煩悶が生まれる。
煩悶思考――
そして決断を下す。
「――ある家に」
決意した瞬間に、声がかけられた。

「――――織斑さん」
先日の少女達であった。

早朝の学生寮に動く影がある。
長い黒髪を後頭部で束ねた少女。ポニーテールの剣道小町、篠ノ之箒だ。
箒は携帯電話を側頭部に当て、セシリアに小声で話しかけている。
「今、織斑先生が寮を出た。剣の包みを持っていたからたぶん、……えーとあの、落っこちてきた人のところだ」
彼を幼馴染の名を呼ぶのは、心情的にはばかれた。
『で、こんな早朝に電話してきた理由がそれだけなのですの？』

向こうの声は不機嫌の色が塗られている。一番深い眠り（ＮｏｎＬＥＭ睡眠時）に無粋な電子音で叩き起されて機嫌が悪くなったのだろう。
「……」
『……きります』
「わっ、わっ待て理由を言う。切らないでくれっ」
声が小声の域を出なかったのは流石としか言いようがない。
『さあ、理由の明示してください』
「えーとだな。あーとだな……」
『感動詞をこれ以上使うようでしたら切らせてもらいますわ』
「はいっ！　私こと篠ノ之箒はしたいです！　お話が！　以上！」
何故か、倒置法。
『Ｗｈｏ（主語を）．』
「落っこちてきた男の人ですっ」
『Ｗｈｅｎ（いつですの）．』
「今朝にでも」
『Ｈｏｗ（どのようにしてですの）．』
「挨拶して一緒に食事を」
『Ｗｈａｔ（なぜそうしたいのですの？）．』
「――私が、織斑一夏の幼馴染だからだ」
半瞬後、息を飲み干す音が箒の耳をくすぐった。
『Ｇｏｏｄ（よろしいですわ）！　箒さん。
わたくし、イギリス代表候補性セシリア・オルコットは貴方に援助を約束しますわ』
「本当かっ」
『ええ、嘘は言いませんの。さあ、玄関で待ってらして。準備をしてから向かいますので』
「ありがとう。恩に切るぞ！」
勢い良く箒は、セシリア（と寮室を占領されている可哀想な女子）

の寮室の扉を開けた。未だに側頭部には携帯電話を当てていた。
「……Ｗｈａｔ（なぜ、部屋まで来てますの）？」
声は携帯越しではなく、肉声で届いている。
「断られたらしばいて連れていこうと思った。――怖いからな」
竹刀を全国大会優勝者の武威を込めて片手で振るった。その風切り音は大理石すら断てそうなちからがあった。

セシリアは試合の感動を後悔した。ついでに、半分脱ぎかけた寝巻きのまま連れ出されそうになり、金切り声を上げた。

余談だが、幸いにも寮長に聞かれなかった。
しかし皆を纏めて非難が飛ばないよう施した橘薫子に、彼についての情報を報告するように約束をつけられた。

職員寮を抜け、学校食堂に朝食を摂りに行く途中の三名に声が投げられた。
高い少女の声である。声を飛ばしたのは鮮やかな金髪の少女である。
セシリア・オルコットだ。
帰還者・織斑一夏と奇縁を結び合ったイギリス代表候補性である。
セシリアは声をかけた。かけたのは織斑――この場に織斑姓は二名いるが、〈先生〉の尊称がついてないので十中八九一夏である。
しかし声をかけてなお迷っている。
――成人男性に見える、同じ齢である筈の――侮蔑してやまない――しかし、未知の兵器で命を救ってもらった男にどう接すればいいのか迷ったからだ。
セシリアは男を軽蔑している。
しかし貴族である。

貴族は恩を忘れ得ぬ。忘れた瞬間、貴族と言う位を捨てた厚顔無恥の獣である。
そのような獣では、セシリアは決してない。
しかしそのような気高い心も、男の――織斑一夏の奈落よりも深く、宇宙すべての闇を凝らせたが如き黒々しい雰囲気には、及び腰にもなる。早朝の爽やかな、晴れ晴れしい空気に空いた漆黒の穴である。

……く、黒々しいですわね、相変わらず。
セシリアは内心冷や汗をかく。長白髪（ながしらが）を髪留め（カチューシャ）やヘアピン、朱染めの左縄で纏めて顔を露わにした男は、セシリアにとって黒い淵である。
高所恐怖症ではないが、音も光もない崖の底を覗くのはセシリアにとっても心（しん）を震え上がらせるものである。

何を食べればこんなに真っ黒になるのかしら――イカスミ・スパゲティ？
因（ちな）みに少年期の織斑一夏の好物は、行き着けの店の中華料理である。
ずれた想像力を働かせているセシリア。彼女は意外と天然であった。

「え～、お、おはようございますですわ」
「おはよう」
「おはようございます」
「――御早う御座います。……オルコットの姫御前に……」
冷厳な、柔和な、嗄れた声でそれぞれ挨拶をする。
……ほら、箒さん貴方もお早くっ！　と激を飛ばす。
セシリアは貴人の笑顔を取り繕い朝の挨拶をする。その背後に何かがある。

小さな両肩に手を置いた少女である。
猟師に撃たれる鳥の尾のように長髪をはみ出させて、自身より少し小さいセシリアに隠れようとしている。
篠ノ之箒だ。
人見知りの気がある箒だが、全く別人に変貌した幼馴染にどう接していいか分からないでいた。
この少女は心が迷っていた。極少の小声で援助を要求する。
「（待て待て待てまだ心の準備ができてないぞ）」
「（目の前にしてまだ迷っておりますの）」
「（後五分、いや三分だ）」
「（朝のベッドじゃありませんのよ。三分も黙っていられませんわ）」
「（そこはほら……エルビスでもビートルズでもイギリス人大好きな歌手の曲をひとつ歌えば――）」
「織斑さん、箒さんが大切なお話があるそうですわ。お二人だけで長時間密室でお話ししたいそうですの」
満面の笑みを浮かべ、箒の繊細な心に蹴りを入れるが如き所業（ことば）。
「わかった。自分で言う。大丈夫だッ！」
全国大会優勝者の握力が可憐な唇を塞ぐ。「ぐむ――！！？」迷いを抱いたまま、迷いを勇気で封印し、一歩を踏み出す。
勇気だ。彼女は家族の手によって、再会と交流を経て少しばかり成長している。ついでに頭痛と心労も得ている。昔の小さな子供ではない。
息を大きく吸い込む。
千冬と真耶は静かに見守り、一夏はただ黙して待つ。

――二人は幼馴染である。
小学四年生まで、まるで姉弟か兄妹のように過ごした間柄である。

別れ、行方不明（死）に絶望しそして再開に、変わり果てた彼との再開に嘔吐こそしなかったが声を漏らした。
鋭く息を呑むような音を立てた怯懦の声音。両手を頭に当て、現実から逃れるように震えていた。
病原菌等の消毒の問題で移動できない四人に、懇切丁寧に謝辞を述べる一夏とも目を合わさず、土に汚れた手拭いを箒はただ握りしめて俯いていた。
セシリアと真耶は目を白黒させて、千冬は黙って肩を抱かれていた。
それから言葉も目線も交わさず、今に至っている。

そして今――二人が関係を結べる機会を箒は得る。
肺腑に溜まった空気。それは活力となり、勇気をさらに奮わせて行動力へと変換させる。
桜色の唇が開かれる――

「お、おはおはおはおはオーハオーハオッパッピー」
「ラップか」
千冬のツッコミが早朝の涼やかな空気に染み入った。
重くなった空気は何処かに消え去えて二度と帰ることはなかった。
空気の読める一夏は聞き流し、しかし頭の片隅のメモ帳に記述した。
セシリアは酸欠だった。

清潔な待合室で自堂は一人、思索に耽っていた。
演算――言語と数字の加引乗除微分積分そして不確定的閃き――思考と云う奇矯で至強な人間の知識活動。
脳と云う超高々度演算装置の活動である。

脳髄は、一つの単語を記録した知識でもって推察する。

『オッパッピー』。

――一体如何なる語か……。

『おはよう』の変化系か、或いは全く別の意味の単語か。謎は尽きない。

一番可能性が低いのは、十代の少女だけに流行している挨拶用語である事。しかしこのＩＳ学園内だけで生活している身の上で、あれ以降一度も『オッパッピー』と聞いた事はない。学生等は普通に挨拶を交わしていた。

一番可能性が高いのは言い間違い――

彼女の滑舌状態ならば十二分に有り得たものであり、明確に近くでいる程変化した空気は其れだったからだろう。

逃亡もまた言い間違いの羞恥からの行動と推察できる。

幼馴染――である事は此処幾数日で辛うじて思い出した――である篠ノ之箒――箒嬢は、姉御前に突っ込まれた瞬間に踵を返して疾走した。

それは逃亡という動詞が相応しい、脱兎の如き脚技だった。

姉御前経由で聞いたが、剣道の全国大会優勝者を戴く業前の学徒らしい。よく鍛えられた健脚。同年齢の自堂と同程度の脚である。よほど労苦と努力を重ねたのであろう。

感慨と考察。朝食を摂り終え、自堂は感情と思考に意識を傾けていた。次いで別の方向へ思考が傾く。

朝食は毎回、帰還の身の上としては仕様がないが心苦しくなる程の一品だった。ＩＳ学園学生食堂勤務調理師の手によるものであり、余計な負担をさせてしまっている。

――早急に自活と自炊出来る立場と状況にならねばならぬ。

料理士の婦人等の手による美味な食事を、毎度七合の白米を胃の腑に収めた。摂取できる時に摂取する習慣――癖が祟った。

満足した。満腹感が充足している。――次の昼食の品書き（メニュー）は何であろうか。
食道楽染みた思考を展開する自堂に声がかけられた。
「一夏さん。どうぞ来てください」
「諒解。直ちに向かいます」
山田教諭だ。共に控え室を出る。歩幅は明確に違うが彼女に合わせて歩む。
視線は前方と山田教諭を往復した。幾らか女生徒等の激しい動悸を含んだ視線が突き刺さるが、意識を向けない。良くある事である。
――と、視界に重心が傾ぐ映像が映った。山田教諭の転倒だ。転倒間際だ。

（絲を）
［色則是絲］

転倒しかけた女教諭を触れずに――女子校の教諭だ、男性が無遠慮に触れる可からず、である――支える。
「――？」
「如何なされた？」
「いえ？　……？」
疑問符を貼り付けながら山田教諭は進む。自堂も続く。
――やがて目的地が見えた。
重厚な扉である。機械式だが、教室や寮室の扉とは一風変わった作風の扉だ。芸術的な廊下等がある学園らしい扉である。
此の奥は学び舎の重鎮とも云えるヒトがいる筈である。
学長室。其れが部屋の名である。
「さあ、ノックしてください」
脇に控えた山田教諭が指示する通り儀を行う。
注意深く、丁寧さを心がけて扉叩礼
「……どうぞ」

壮年の女性の声が応答の意を投げた。
「失礼を致します」
礼を声にし、扉を開け入室する。

織斑一夏と言う人間は、姉と同じ胎から極々尋常に生を享けた。
それは母子手帳や当時九歳であった織斑千冬が証言し、出産を請け負った医院や医師や看護師も同様の意見によって認められる。
精子と卵子の結合があり、ほかの数十億の赤の他人と同様の生化学的現象により姉とは別の染色体を選択して男性として胎内で成長した。
胎教に悪い行為を母体が強行した事実は見受けられず、昔年の父親が悪魔崇拝や黒魔術儀式に耽溺し未来の生贄に我が子を選んでいたと言う事も無い。
助産師が致命的な失敗をした事もなければ、産児保育室に異常事態が発生した事件もなく、母乳や離乳食に危険物質や環境ホルモンが一定濃度以上含まれていた事もない。
三ヶ月や或いは二十ヶ月と言った異常期間の妊娠を経た事もない。
産まれてすぐ人語を解し、歩き、歯が生えそろっていた事もない。
極々標準的な認識期間を経過して、極々標準的な体重と体格で彼は産まれた。
健康な男児としてこの世に生を受け、一般家庭の生活を物心つく前まで享受していたのである。
その物心つく前の年に、両親が失踪した。
理由は一切不明である。
実姉の友人である篠ノ之束の関与も疑われたが、証拠もなく、また人間として認識している存在が三名だけと言う束にとって友人の両親などただあるだけの肉人形に過ぎない。
兎も角――

彼等の両親はいなくなった。
幼い姉弟だけが残された。
その頃から姉の弟への言動に変貌が見られる様になった。

“――お前の家族は私だけ。一夏の家族は千冬(おねえちゃん)だけよ――”

その言葉には、自分達を捨てた両親の恨みや辛みが含まれていないとは否定できない。
しかし、物心つく前の弟に両親の不在と言う重みと苦しみを感じさせたくないと言う優しさも確かにあった。
そして両親への愛が与えられなくなった姉による愛の濃度の補完もあった。
弟の愛を自分一人に向ける事で足りない両親分の愛情を補おうと言う、少女の寂しさを紛らわせる拙い行為があった。
厳格な性格として知られた彼女でも、父母の愛称を呼べない日々は寂しいものであった。
その浅慮な躾が、悲劇を生んだ事は一切無い。
姉もまた、十年前の大事件の片棒を十四歳の時に担いだとは言え、尋常な少女である。
女性に対しての鈍感さは天井知らずに増加したが、これは姉の対異性教育の失敗ではなく弟の生来の気質である。
偏愛による近親相姦の悲劇の道も幼さと真っ当な精神により、弟も姉もその道から遠ざかった。
あるのはただ両親がいなくとも仲睦まじく暮らす姉弟の姿だけであった。
彼は人間として正しく生まれ、正しく育ち、正しい人間になった。
それは厳然たる事実であった。

剣道道場の幼馴染と性別の差を超えて仲良くなった。家族ぐるみ

で良好な関係を結んだ。
彼は良い少年だった。
姉は良い少女だった。

剣道道場の幼馴染が男子の集団に苛められていたのを目撃したら、矢も楯もたまらずかばい立て、仕返しをした。
彼は良い少年だった。
姉は良い少女だった。

苛め返した事実が問題となり、保護者監督の不行届きの責任を姉が被った際は、姉への申し訳のなさから、より良く考えてから行動を起こした。
彼は良い少年だった。
姉は良い少女だった。

中国人の友達ができ、その友達がからかわれているのを見て庇い立てた。
彼は良い少年だった。
姉は良い青年だった。

友人の中華料理屋に呼ばれ、その友人の両親の手料理を御馳走になった際はきちんと代金を払った。
彼は良い少年だった。
姉は良い青年だった。

ＩＳ操縦士として多忙を極める姉の変わりに家事全般を賄い、剣道をやめてアルバイトに精を出した。
彼は良い少年だった。
姉は良い青年だった。

その事実を轡木学園長は織斑教諭から直接聞いたとき、深く深く嘆息した。
教師と言う存在の無力を嘆く吐息だった。
教師たる者は傷ついた子供を癒すことができる。
教師たる大人は同僚を慰めることができる。
しかし癒やしも慰めも彼には糠を打つ釘のように手応えなく、否、闇間に石を投擲(うち)つが如く透り抜ける。
そう思う。思ってしまう。教師の経験が諦念を選択した。選択し、自己の慰めの嘆きを得てしまう。
――そして煩悶と苦悩と無力感を抱えた轡木学園長は、自身を恥じ入りさせる存在が扉叩(ノック)するのを聞いた。

篠ノ乃箒は机に突っ伏していた。頭を抱え、思考の渦に入没していた。
授業中である。教師は黒板に文字を書き連ねている。
「……――で、……――が、……――になります」
教師の言葉も全く耳に入っていない。今、彼女の耳に入るのはある男性の声だけだろう。
……一夏……
それは一つの名である。
“面と向かって呼べない”名である。
他者に『イチカ』と音する事は簡易なれど、彼の者に向かっては全く難題であった。
……一夏……

彼は彼だと思う。
顔を見ればわかる。一時も忘れなかった顔だ。
小学四年生時より二倍以上も年を経た容貌の織斑一夏だ。
そして見るも残酷な程黒い空気を醸し出す異常な人間だ。
何があれば、人間がああも――宇宙や奈落の凝縮体を想念させる程黒くなるのであろうか。
十五にしか満たない人生では、少女である箒には、大人の容貌を得た一夏の心情も半生も想像できなかった。

……一夏……

わからない。
分からない。
織斑一夏がわからない。
そして、自分が本当は何をしたいのかわからない。
会って、話をして、それで――

「……」
右の胸乳を左手で抑え、教壇の反対側、荷物入れのロッカーを脇越しに見る。
竹刀入れがある。中には竹刀がある。
剣。――剣道。
一緒にした剣道……。
思い出深い剣の道。
彼と一緒に鍛え、育んだ剣の技。
これは何も言わない。
だが、問う（・・）ことはできる。
知る（・・）ことはできる。
剣の道に生きるものは、剣にて人を知る。

「……」

箒は立ち上がった。大凡、優勝者決定戦でも出したことのないほどの気力と集中力を振り絞って顔面中に脂汗を浮かべた。

「篠ノ乃さ――――んんッ??!」

「お腹痛いので保健室に行ってきます」

演技である。気合である。気合で発汗した。

返答を待たず、箒は教室を飛び出した。

高速であった。校則違反であった。

機械音を立て、扉が斜め横にスライドして開く。そこから水が溢れるように黒い気配が広がり、学長室に浸(ひび)き渡る。

鉄紺色の長着に洗い晒しの白シャツと擦り切れきった黒のデニムジーンズを靭(つよ)く伸びた長身に纏っている。

腰には骸骨バックルの革ベルトを二重に、手には上品な薄手の革手袋だ。

高い位置にある整った顔の上――頭には膨大な量の――それこそ白滝を思わせる長さの白髪が雑多な器具で纏められ、流されていた。

混装・異装、である。

奇異な風貌である。明治大正期の流行を取り入れた時代錯誤と言い換えてもいい服飾であった。

異装を衒(てら)う男は、重厚な鉄の札(さね)を付けた軍靴(ミリタリーブーツ)の足音も静かに歩み、立ち止まる。

静々と頭を下げる低頭礼を行い、

「――お招きに与り参上仕りました。織斑一夏に御座います」

よく通る嗄れ声が、男らしい色を含んだ音声が三十疊程の学長室

を泳ぎ、三人の耳小骨を震わせた。
　三人は話通りの若い外見から想像もできない、白寿の老人が如き嗄れ声に驚の字を感想に得、そして顔を上げた一夏を視野に収めた。
――――――――――――――――――――――――！！！！

　驚は畏の字へと変換する。
　黒。
　黒い気配など瑣末、枝葉末節、氷山の一角、欠片だと納得できる無尽暗黒（スラッシュ・ダーク）。
　深さは奈落や始源深淵（ギンヌンガガプ）を思わせ、広さは三千大千世界を想わせる。
　射干玉（ぬばたま）の双眸が礼儀正しく三人を見つめていた。
「……はい」
　学園の長、轡木学園長は硬直した顔面を無理やり動かし、和かな表情を作り上げる。辛うじて声を絞り上げた。
「此処一週間御挨拶に行けず、只自儘の目的に従い床を穢した身の上に賜り下さった数々の御援助に対して深く御礼申し上げます」
再度、深々と頭を下げる。
「そのようなことを思い悩むことはないのですよ」
「世界の連合から認められた治外法権地に正当な手段無く侵入した罪科（とが）――
　学園の長であらせられる貴殿の御差配あればこそ、拘束無く此処におれるのです。その大恩決して忘れませぬ」
一夏は真摯な感謝の思いを込めて、頭を下げ続ける。
「…………」
　健常。
　　尋常。
　言葉遣いは丁寧で古臭く、声質は老人のそれで、髪も服飾も一風変わっているが――そんな瑣末ごとなど気にならなくなる異和感（チグハグ）。
　　　異常。

異形。
悪人の様に憎らしくなく、死体の様に無味乾燥ではなく、悪魔の様に凶(まが)っていない。
されど悪より黒く、死体より黒く、悪魔よりも黒い――

学園長は思う。
なんてこと。なんていうことなの！　織斑先生の弟さんは何が起きたの……ッ！
石動は思う。
この人は……これは……人なの……？　何故そう思ってしまうの……！？
川崎は思う。
人の形をしている。だが……ッ！　分からない！　心理が分からない！！

三人は喉を鳴らす。
緊張の意を表す。畏れを抱く。
それを開始の鳴鐘(めいしょう)として本日の会談は始まる――――

「率爾ながらＩＳ操縦士育成特別国立高等学校の総指揮を担う貴殿に具申します。
“学外と階下で盗聴・盗撮の仕儀”を行なっている方々が御座います。
方角、三十度から四十五度方向。距離、半里（二キロメートル）に機体反応を当方は認識しております。
次いで、方角ほぼ直下。距離十二米(メートル)に機材を使用しての盗聴を行なっている御方を検知しております
――如何に？」
「――――――――――――――――――――――――――――――――！

！！！」

一夏を除く全員の表情が凍った。

結論だけを述べれば、今回の会談の人数は一名増える運びとなり、もう一方については後日お話をするという運びに一夏は持っていった。

本日の参加者は計七名。

ＩＳ学園学園長、轡木倉子。
ＩＳ委員会学園担当官、石動・シェーン。
未成年者略取誘拐特別捜査官、川崎千々岩（ちぢわ）。
一年一組副担任、山田真耶。
一年一組担任、織斑千冬。
ＩＳ学園生徒会長、更識盾無。
そして帰還者、織斑一夏。

促されるまま自堂は艶めく黒の本革の長椅子（ソファー）に腰掛けた。
最上品の座り心地が尾骨から背筋に伝わる。柔らかさに揺れた腰を伸ばし、掌を膝に当て面談の姿勢をとる。
精緻な硬質硝子の机を挟んだ対面の長椅子には、右側から順に刑事の壮年男性、学園長の老年に近い壮年女性、官僚の壮年女性が座している。
一人を除き、各々三十路を過ぎの働き盛りの齢である。脇に控える顔馴染の教諭二名は二十代だ。姉御前が、二十五には届いていな

いはずだ。山田教諭は十代に見えるが、最低でも二十歳だろう。
二人に隠されるように更識盾無生徒会長殿が視線を送っていた。
「……」
自堂からは何も云う事はない。説教も指導も教諭の仕事である。
――ともあれ、老いも若きも混ざり、学園関係者が揃い踏みしている。
しかし全員の年齢を足しても自堂の実年齢には到底届かない――
思考切替。
自堂は真ん中の学園長に注目する。皺の有る顔が柔和に動いた。
「改めてご紹介させていただきます。本学園の学園長を務めさせて頂いております。轡木倉子（くつわぎくらこ）と申します」
洒脱な灰色のスーツ姿の女性は礼儀正しく申す。
「IS委員会特殊事件担当捜査官、石動・シェーンです」
朱のスーツに熟女の媚肉を隠した女性が瀟洒な動作で自己を紹介する。名刺を拝領した。
「警視庁の川崎千々石（ちぢわ）です」
力強い肉体の男性刑事が実直な態度で言う。警察手帳を差し出された。確認。
「諒解しました。改めまして織斑一夏に御座います」
再び自堂も紹介し、低頭する。
「お茶です」
山田教諭が自堂から順に紅茶を配る。四つ置かれ、脇に控えるのを確認すると轡木学園長は口を開いた。
「大変遅くなりましたが、織斑さん。わが校の生徒……篠ノ之箒さんとセシリア・オルコットさんを助けていただき有難うございます」
清楚に頭を下げた。

謝礼。
あの日の事。
あの一週間前の、自堂が帰還した日。

少女二名に善を行なった日。
謎の機体に悪を行なった日。
そして再開の日――
織鐵を用いた仕儀に対して、武によって壊し、人を救う仕儀に対してこの方は礼を云っている。――理解した。
「……はい。頭を御上げ下さい轡木学園長殿。
先日の兇器（まがきもの）を以っての振る舞いは、一身上の都合と一心上の判断によるもの。
差出た真似と御咎めなくば重畳。感謝などして頂くに及びません」

――そう、あれは独善だ。あれが善果を齎すと祈る事は出来る。
しかし練習用闘技場（アリーナ）の中の少女等の身の安全を確保する為に、外へ危険を押し付けた。
善を独りにだけ向けた。
善因の悪果。
悪因の善果。
ヒトと自堂に善益を。ヒトと自堂に害悪を。
ヒトは兎も角、人世に広がらなければよいが……。
独善の思考を遮る声が上がった。
「その様に考えないでください。貴方は何も関係なく、何も分からない状況下でわが校の生徒たちを怪我一つなく助けてくださいました。それ以上は望めません」
教諭らしい高潔な言（げん）。全く正しき意見である。ヒトの分を考えた意見である。
しかし――いや、戒める。
「はっ。貴方の様な御美しく学び舎の長である女性（にょしょう）に御感謝を戴くなど、過分の誉（えい）、恐縮至極に御座います」
年下の女性の純粋な意思なのだ。甘んじて感受するのが妥当である。
「あらあら口のお上手い御方ですこと。それに誇って良いのですよ。

貴方は尊い事をしたのですから」
　実直な感想だ。轡木学園長は美しく老いている。醜く止まった自身とは大違いだ。後半の意見にだけは賛成できぬが。
「轡木学園長様を惑わす意図（つもり）は決して。しかし御無礼を申し上げました。御詫び致します」
　彼女は忘恩無恥で礼節を欠く人間では決してないのだろう。これ以上の感謝の押し合いは無為である。
「……」
「……」
　朗らかに笑う轡木学園長の両隣の二名の沈黙が泳ぐ。壁際に控える教諭達が眼を合わせる。窓の外は晴れ晴れとしていた。
「あらあら横道にそれてしまいましたわね。それじゃあ織斑さん」
「は、何なりと」
「先程も聞いたとおり、川崎さんは警察の方です」
「は」
　警察……公の秩序と市民の安全を守る、国家の統治権に基づく行政機関。
「二年ぐらい前の貴方の誘拐の日。貴方が消えてしまったその日。――そこで何があったのかお聞きしたいとお申し出です」
　川崎刑事殿は言葉を首肯で肯定する。
「そして石動さん。彼女はインフィニット・ストラトスと言う機械を倒置・管轄する国際機関のメンバーです」
「認識しております」
　国際ＩＳ委員会……国家のＩＳ保有数や動きなどを監視する委員会。ＩＳ条約（アラスカ）に基づいて設置された国際機関である――と姉御前に教えられた。
「貴方の劔冑（ツルギ）なる兵器についてお話が聞きたとのお申し出です。出来れば手に入れるまでの経緯についても」
　石動委員は清楚に首肯で肯んずる。
　自堂は一つの疑問を得る。

「――自堂の手荷物の中の資料や専門書では御不足でしたか」
基本とそこからの発展を抑えた資料として正しい物を揃えたつもりであったが、
「専門用語や製造方法、兵器としての歴史などの基本は抑えております。
――しかし、基本からまったく外れた（・・・・・・・・）貴方のツルギについて我々は知りたいのです」
杞憂であった。
「成程。――石動委員殿、質問が御座います」
「はい」
「旧約新約の両聖書について違う点は見受けられましたか。西洋社会では基督教は文化基盤として最重要の位置を占めております故、一般常識として抑えておきたいのですが」
栗色の瞳が左上に動く。右利きの人間が場所・物などの記憶を再生する場合の所作だ。彼女は左手首の腕時計と右手のペンだこから右利きと推理できる。
故に、彼女は資料等の文字情報で報告を受け取っている。
「……旧約ではカインの末路。ソロモン王の力。バベルの塔がツルギと推察できる記述などがこちらの聖書とは違いますわ。
新約では、受胎告知が無い点、イエスの奇跡と伝道と末路はほぼ同じ内容でしたが、使徒の何人かが殉教ではなく鍛造となっております。特に目を引いたのがサロメの要求が首ではなく、戯曲のように愛でもって洗礼者ヨハネを――……のヨハネを求めていたという点です」
首肯。単に劔冑と言う単語を抜いただけでは話は合いそうに無い。こちらの世界の聖書を読むべきだ。教会へ行けば売っているだろうか。
「理解を得ました。
劔冑夢想論（ファンタジー・オブ・クルス）のツルギの起源について。
ゼグラー社発の数打の素材について何か御考察、御意見は御座い

ますか？」
特にあの文献（むそうろん）は真実の一端を穿っている。金神魔王尊の現出の後、ジーバス邸や緑龍会のメンバー宅から発見された其れは、内容から瞬く間に書籍として氾濫し、劔胄起源研究の参考文献として取り扱われる様になった。
其の結果は、教授として学者として栄誉であろう。
……。
益体も無い事を夢想する。
彼は今頃、無垢な下半身を晒す少女の園で、少年の様に微笑んでいる光景だ。
……何故か、妙境の画匠が描き上げた一幅の神聖な象徴画の様な光景に思える。
益体もない夢想をしている間に視線は左下に動いていた。
「……合憎まだ読解と資料解釈が不十分でして、お力になれず申し訳御座いません」
誰かに口頭で指示された内容を話す石動委員。複製（クローン）人体の此の世界での倫理、宗教的意見を聞きたかったが、応えられぬのでは致し方がない。
「有難う御座います。御両人の御申し出は認識致しました。……轡木学園長様は、他に何か有りませぬか？」
中央に水を向ける。
「いいえ、私は是非ともお礼を言いたかったのです。それにどちらかと言えば聞くほうではなく教える方ですよ私は。――教師ですから」
皺の浮いた顔を破顔させる。見る者の心を落ち着かせる仕儀だ。感服仕る
「警察関係者以外――いえ、愚問でしたな。此処は治外法権地。日本國とは法（のり）と則（さだめ）が違いますか」
「――決して口外しない事を学園長の名を持ってお約束致します」
「私も、警察の誇りにかけて……決して貴方のプライバシーを

汚したりせず、また解決に総力を尽くす事を約束します」
学園長様は真摯に、刑事殿は重々しく、誓いを立てた。
「……諒解しました」
吐息一つ。
「なれば御説明せねばならぬでしょう。
自堂の――織斑一夏と言う者が如何な原理と理由にて、彼(か)の世界の漂流者(フライングマン)と相成ったかを。漂流者、織斑一夏の生誕を――」

脳髄(たましい)に張り付いて剥がれぬ記憶を引き出す。
恐怖。
慟哭。
憎悪。
納得。
諦念である記憶を舌に乗せる。

「結論から申し上げれば、何一つとして悪因ない事故に御座います」

弟は訥々と語る。弁士のようにではなく、感情を込めず単純作業のようにただただ記憶を言葉として羅列している作業のように語る。
帽子を目深に被らされ、犯人達については何も分からないという。
ヘッドフォンを取り付けられ、大音量の音楽しか聞いていなかったという。
手を膝の生地にくっつくくらい握り締めていて逃げる事もできなかったという。
顳(こめかみ)？に武器……銃らしきものを突き付けられていて、嘔吐しそうな恐怖に震えていたという。
犯人についてはまったく分からない。

しかし彼らは悪くない。
一夏が消え、漂流(なが)れた事については一切関係がない。
埒外の事象と体験についても同様だ。
だから――悪くないと――そんなっ、そんなっ！　そんな様になって言うのかーー！！

正直言って立腹しなかったのは嘘になる。
一夏を誘拐しくさった悪漢どもを貶すでもなく、自分の身の上に生じた悲劇を哀れむでもなく、ただただ淡々と話す一夏に腹が立った。
激昂した。
誘拐犯よりもその態度に憎しみと哀しみを胸に打たれた。
不動の姿勢のまま、胸中でマグマを滾らせる私は話を聞き続ける。
話は一夏の精神が限界に近づこうとしていたところだった――

――それは異形だったという。
後部ボンネットに左足を埋め、後部ガラスを粉砕して右足が車内に、座席を粉砕して侵入している異形だったという。後で知った（・・・・）ことらしい。
無論この時の一夏は前を向いていて、さらにガラスのシャワーを浴びていたからその現象が見られたわけじゃない。
目隠しはその現象に驚いた誘拐犯の一人が暴発させた銃弾で帽子のつばが撃ち抜かれ、勢いのまま帽子は落ちたらしい。
久方ぶりに光に晒された目には、左肩を穿たれた運転手が目に入った……。そして声が聞こえた。

「……な……にごと……だ、む……らま……さ……」

今でも忘れる事の無いという、その単語(なまえ)。
“むらまさ”――
彼ら（・・）は彼らの意思によらず車に着地した、と調べはついたと語る。
彼らは認識していなかった。
車の上に着地した事も右足の先に子供がいた事も――
だから次の瞬間、単純明快にして小説より奇(き)な偶然が起きた。

悪くない。
誰も悪くない。
全ては偶然(フェイト)。
誘拐犯も、時の激流から偶然足だけが外れて車の上に着地したむらまさも、織斑一夏も悪くない。
全ては運命(さだめ)。
だから誰も悪くない――と、そんな顔で語るなッ！！

脚。鋼鉄の脚。赤い甲鉄の脚だった。足の甲から刃の様な突起が生えている脚だった。
それを左肩越しに見たという。密着し今にもぶつかりそうな間近でそれを見たという。
足を埋めた〈むらまさ〉は当然の帰結として、はまった足を引き抜いた（・・・・・・）。だから必然的に、突起が左脇に引っかかった――
それは釣り針と魚のような図柄であったと語る。
凄まじい金剛力で身体は引かれ、左手の平が膝を鬱血するほど握り締めていて脇を上げる事も出来ず体を車外に出された。

後半分が踏み潰された車を俯瞰した。
そして、それが最後の光景だったという。
時流(なが)れに飲まれた――

そして――と弟は続ける。
告げる。
霞となって消えた右手に鞘込めの西洋剣が逃げられていた。どよめく私と弟を除いた数人。
それは中世に打たれた剣だ。
写真を幾枚も取り、何処の何時の物か専門家に調べてもらった。
――いや、調べるまでもなかった。
その剣は特徴的であり、銘が刻まれてあり、その男の象徴となっていた物だったから。
その男はルネサンス期のヨーロッパに誕生した無頼の医師。
最初の医学革命を為した、近代医学・医化学・科学・魔術の創始者。
中世から近代の医師を比較しても、誰一人として彼の到達地点へたどり着いた者はいないと歌われる達人。
スイスのトリスメギストゥス。
――〈パラケルスス〉。

弟は告げる。
託宣を告げる神官ように。
罪科を吐露する咎人のように。

「そして飲まれた先。行き着いた先。漂流し（ながれ）た先。
中世の欧州と云う場所。
此のアゾット剣を佩いた恩人がおられた時代。
其の場(せかい)の、其の時(じだい)の漂流者(フライングマン)と――織斑一夏なる少年は成り果てました」

フライングマン。
飛行士、操縦士などを表す英単語であるが、中世の〈さまよえるオランダ人（Ｆｌｙｉｎｇ－ｄｕｔｃｈｍａｎ）〉やＳＦの異世界や別時代に取り残された者を表す用語である。
後者の表す意味合いは常に一つ。

もう――家に帰れることはない。

「――――」
突起から解放されて、息も出来ない状況でまず見たのは赤い騎影。
“村正”なる深紅の鎧士。
禍禍しい鬼面の武者姿。
それを記憶に焼き付けた。
次いで、痺れた右手を伸ばす。
赤い武者に。
海へ飛び込む車に。
割れた月に。
燃え行く寺で逃げ惑う武将に。
火刑にされた救国の魔女に。
金の為に殺された十字軍騎士に。
社会主義革命を失敗した政治家に。
アルプスを越える雷光に。
雷光を打ち破る暗黒大陸の覇者に。
見目麗しい北海の海賊に。
豪放磊落の態度の紫電改甲の仕手に。

敵陣突破の撤退戦をする薩摩隼人に。
正義そのものとなった英雄に。
復讐を互いに為した男女に。
墜ち行く金色の神に。
愛を想い、呪いによって飛翔する悪鬼に。
楽しい夢を見た子供の様に笑う白銀の悪魔に。
菩提樹下で悟りを得た目覚めた男に。
水の大天使に告示を受ける商人に。
磔にされ、血涙と慟哭と呪詛を上げる男に。
或いは――
必死の形相で空っぽの大型貨物容器（コンテナ）に輝く剣を振り下ろす実姉に
――

しかし、

どれも、

届かない。

触れたのは、赤錆色。
感じたのは、血臭漂う草叢。
見たのは、異端審問で火刑と拷問刑となった酸鼻極まる死体の繚乱。

暗黒中世の欧州大陸。
胃液と血潮香る絶叫が、死肉の原で谺した。
漂流者としての誕生の哭き声を唄った。
慟哭。
それを――
屍肉を食（は）んで肥太る蟲が、見下した目で往生際の良からぬ奴と見つめていた。

道を外れた者が独り、
在るだけだ。
その絶望は言葉に出来なかった。言葉ではない情報(ながれ)が胃の腑に落ち、心魂にとどまった。

温くなった紅茶を口にする。荒唐無稽に過ぎる話を語り終えた熱を冷ます。
五種の沈黙が流れる。
轡木学園長は深慮の沈黙を。
川崎刑事は呆気の沈黙を。
石動委員は停止の沈黙を。
山田教諭は驚駭の沈黙を。
――そして姉御前は瞋恚の態度をあらわした。
「ふざけるな！」
「巫山戯てはおりませぬ。真実は其れで、事実は此れで御座います」
胸座を掴み、自堂を引き摺り立たせる。鋭い音。硝子面に紅茶が零れ、陶器の縁が欠けた。
「お前が“こうなったんだ”。こうも“成り果てたんだ”。そこに悪が無くて、どこに罪が無いと言えるんだ！」
「あれは天災です。此れは事故です。
只在るがままのモノが動いて巻き込まれたヒトがぶつかった――然り而(しこう)しても結論は其れに御座います」
自堂は調査し、確認している。“真紅の村正”が時の彼方へ飛ばさた事象を。
「ぎっ……誘拐犯はどう思う」
「織斑一夏を略取した罪は裁かれなければなりませぬが、責めるべきはその罪科だけです」
「“むらまさ”は、お前が乗せられた車に着地したぞ。事故の原因

だ」
「偶然です。彼等は時の流れと云う激流に藻掻き、暴れ、偶然爪先がヒトに引っ掛かった……。悪意無き事故に御座います。悪意無き事故を償えと訴えるは業腹と云うもの。
宜しいか――」
「……？　なんだ？」
“如何な荒唐無稽で信じられぬ真実であろうとも、可能性を除外し尽くし最後に残った物が真実である”――大英連邦の名探偵の言葉です」
事実――其れのみを述べる。
無実――自堂は悪鬼の罪科（とが）の有無を証明する。
「！」
両手で胸座を締め上げる。睨め付けるその眸は、顔は悲哀。
姉御前の胸中は推量出来る。
身内が、例え悪意と害意なくとも巻き込まれ、負傷したのだ。
怒りを相手にぶつけ、慈しみを身内に注ぐが人間（ヒト）の行い。
然り。
自堂は其の儀に感服仕る。
貴き、美しきヒトの情けなり。
なればこその我が身への叱責。
責め立てるべき者は世におらず、身内の感情は押し並べて（・・・・・）事故の被害者へ向く。
憎悪と瞋恚を悲哀の涙の洪水に呑ませ、残った物を呑みこませる。
「織斑先生！　落ち着いて下さい」
「そ、そうですよぉ！　織斑先生。一夏さんを離して下さい」
身内（上司と同僚）が咎め、諌める。
「……」
沈黙。静々と手を下ろす。肩より下がるまで静止して待つ。
荒く、熱い吐息が腹に掛かる。
「はぁ……ふぅ……。――すまなかった」

「いえ、」
短く応答(いらえ)を返し、妥当適当の儀を実行する。
「――川崎刑事殿、石動委員殿、姉が失礼を致しました。愚弟・織斑一夏が変わりに御詫び申し上げます」
毛羽立った絨毯の上に叩頭礼。
土下座の礼。
会談に参加している方々を置いてきぼりにし、姉弟内で諍いを行なった謝罪としては至極適当と判断する
二対の視線が頭を刺す。熱くなく、鋭くない。
「おやめなさい織斑さん」
「気にしないで下さい」
「右に同じ。私どもは気にしておりませんわ」
許しを得て、頭を上げる。席に着く。当然ながら、場は乱れた。
「お話を続けられる雰囲気ではありませぬな。
――石動委員殿」
「は、はい！」
上擦った声音で返事をする。
「身勝手な意見と重々承知しておりますが、貴方の御申出は午後からの劔冑の試験的運用の場で叶えようと思いますが、宜しいでしょうか」
「はい。承りましたわ」
機敏な動作で頷く。
「諒解。――轡木学園長様」
「ええ、もうお昼ですし。会談は終了といたしましょう」
他の四人も頷く。自堂も頷いた。欠けを得た陶の茶器を元に戻す。受け皿に乗せる。
「御忙しい中、御足労に報えず申し訳御座いません」
謝罪の言乃葉によって、午前中の会談は終了した。

「……ふぅ」
「御苦労様です。轡木学園長……代理」
「貴方も……」
言葉を遮り盾無は言う。溜息と共に。
「私は何もしていませんよ。――と、いうより見つかって渋々引っついてきただけですから」
「……本当に苦労をかけるわねぇ。あの人に頼まれたのでしょう？」
「ええ、ですがさっさと見つかってよかったと思います。あんな黒い雰囲気の男に一人いるところを詰問されたくありませんよ」
首を横に振り、想像した光景を振り払う。
暴力や汚辱を持って詰問する――とは盾無は微塵も思わなかったが、面と向かって後暗い話をしたくはない。
「――……本当に黒かった（・・・・・）わねぇ」
「ほんとに黒かった（・・・・・）ですね」
「どうしましょう。普通だったら卒業していない中学校へ、送るべきなのでしょうけど」
「見た目とか卒業とか勉強とか以前に、中学生とコミュニケーションがとれないと思いますよ。――ドン引きされて」
「黒いけど――雰囲気なのよねぇ」
「意識を向けなければわからない黒さ――でも、意識を向けたとたん奈落が隣に開いてる――って状態です。はっきりいってビビりまくります」
「やっぱりそう思う？」
「そう思います」
織斑一夏がどれ程良識と仁徳を有していても、多感な中学生にはあの黒さは問題である。
そして二人共、それ以外の問題をあえて避けていた。

「……どんな顔してマスコミに説明したものかしら」
「テレビ越しだったら問題ないんじゃないんですか？　雰囲気が黒いんですから。
印象――目付きや顔付きとは別の要因から生まれる黒さですから」
「見た目もねぇ」
「“とても大きく育ちました”。大人っぽい女学生だったお姉さんと同じく大人っぽく育ちましたと説明すれば」
明暗とばかりに盾無は言う。
「あれは完全に大人の体格でしょうし、対応も大人そのものだわ」
「大人というより昔の官吏みたいな口調でしたよ、アレ（・・）」
「時代小説みたいな口調よねぇ。私でもあまり語彙がわからなかったわ」
「“然り而して”なんて普通使わないですからね。……どういう意味なんでしょうか？」
「確か――前に述べた事柄を肯定する――だったかしら」
「はあ……」
古臭い口調を肴にした談義は続く。

「――語彙は難しくてわからなかったですけれど……」
「けれど？」
「一夏さんが私を“御美しい女性”と言ったのは本心だわ」
皺貌に朱がさす。“女”の表情を得ている。
「え〝……。
なにこれ？　誰も喜ばない昼メロの始まり！」

「――それじゃあ仕事の続きをしないとなりませんので」
「ええ、ちゃんとお説教したと聞かれたら彼には伝えておくわ」
倉子は言いながら茶道具を片付け始める。と、西洋茶器（ティー・カップ）に触れた

手が震えた。
「――あら？」
「どうしたんですか？」
「いえ、――あの？」
どう言ったものかと倉子は戸惑う。盾無の視線は老人班の浮かんだ手の中に辿り着く。

綺麗な、艶やかな、傷一つない茶器が素っ気なく、しかし確かに手の中にあった。

姉御前は山田教諭と並ぶ。自堂はその背の横に並ぶ。連れ合いの如く並ぶ。廊下を歩き出す。
「本日の場所は何処（いずこ）に御座いますか」
食道は生徒と教員が利用する場所である。早朝の時間なら兎も角、昼間は自堂は利用する事は出来ない。
「えーと、アリーナの控え室でお弁当をいただきましょう」
「諒解。種類は何弁当ですか？」
「鯖の味噌煮弁当です」
「味噌との相性が良好かと」
「ええ本当に美味しいんですよ」
歩きながら会話をする自堂等の前に人影。長く伸びた黒髪の立ち姿。
箒嬢。
オルコットの姫御前は連れ立っていない。
力強い眼差しは、姉御前を向いている。
「――？　どうした篠ノ之。まだ昼休みにはなっていないが」
「織斑先生」
一言、告げる。

決意秘めた凛冽たる軍声で、
「私を――私を使ってください！」

ある時、ある場所で――
この言葉は意味を持たない。
時もなければ、場も無い。
此処と呼べるか、彼処と呼べるのか――
人間が開発した時間という概念は意味も無く、価値もない。
場所という概念もまた意味が不明である。

とりあえず此処と仮定とする。
仮定された此処の外観を明記する。
白い継ぎ目のない石かコンクリートか、素材は不明な廊下である。
その廊下は延々と続いていた。
――そう、延々（・・）と、である。
遥か先が見えない。前後と言ってもいいのか分からないが、果てがない。
無限。
或いは無間。
限りなし。
間無（はざま）し。
無限続く廊下には多種多様の扉が納まっている。
扉は一つとして同じ物が無いのではないかと思える程種類が多く、幾万幾億か数え切れない程である。
非常識的である。
白の廊下は延々と継ぎ目はなく、多々の扉は一つとして同じものはなく壁を埋め尽くす。
その非常識空間に男は在った（・・・・・）。

男。
少なくともそう見識できる。
髪色肌色は西洋のもの。ベストにワイシャツ、ネクタイに袖カバーの四つの装束は事務員のようにも見える。
椅子に座り、机に向かい新聞を読みながら喫煙する様は休憩中のそれである。
そして机の男から向かって左側には、日本語（！）で指示書きが記された整理券発行機が置いてある。
廊下を遮るように置かれた机の前には『昼休み中です。しばらくお待ちください』のプラカードが下がっている。
新聞を読む事務員。紫煙の香りがくつろいだ昼休みの空気を描く。

非常識の中の常識――
短絡的に考えればそう思える。
しかし非常識の中に在る男がそうではない事は、目を見れば皆目分かる。
無。
何も読み取れない。
凍（こご）って透徹した水晶体には、光も闇もない。
廊下と同じく“無”の何かがあるだけだ。
その無の双眸が動く。新聞から目を離し、眼前を注目する。

変化は唐突。
妖言は突然。

「紫（むらさき）」

廊下の果てから一点、黒墨（こくぼく）の染みが現れた。
黒は瞬く間に広がり、男の眼前で急停止。全てが黒白に染まったワイヤーフレーム状の廊下により一層黒い影が顕現する。

影の形状（かたち）は少女である。
左右非対称の手袋と靴とワンピース。
黒の服飾を纏い、星印のネクタイと首の下げ札が闇の中に栄えている。
荘厳な動作で長袖の右腕を掲げ、女王のように不遜に語る。
「まだ帰還者（イレギュラー）の動向を調べていたの紫？
頑張り屋さんね。そして無駄なあがきよ紫。
たとえ彼が漂流者（ドリフターズ）の側についたとしても、
たとえ彼が廃棄物（エンズ）に敵対したとしても、
――全ては無駄なのよ。全て私の勝ちなのよ」
可憐な唇は兇（まが）き笑形を得る。

〈紫〉――それが男の名か。
紫は視線を新聞に戻す。視線は文字と絵を辿る。
『IS学園に帰還者現る！？』『織斑一夏』『剱冑“織鉄”』『ゴーレム？撃破』『篠ノ之博士会談予定に歓喜』『漂流者？　廃棄物？』等の見出しと文字が踊り、白髪の男の顔写真が添付されている。
「改めよ〈EASY〉。彼はイレギュラーなどではない。
認識せよEASY。彼は元の鞘に納まった。――これからだ（・・・・・）」
無表情に少女EASYに言い放つ。
苦々しげに、憎々しげに黒の少女の貌が歪み、堪えを食い止めるように唇は引き結ばれる。
「哀れな男よあなたは、紫。もうこれから（・・・・）は無いのよ――」

顕れたのと同じく唐突に、ＥＡＳＹは消え去った。
ワイヤーフレーム状の廊下は静かな悠久の廊下へと戻った。
紫煙の香りに混じる仄かな少女の残り香が紫の鼻腔を擽（くすぐ）った。

そして次の変化が起きた。
新聞が歪む。
文字と絵が溶かした絵の具の如く混ざり合い、新たな記事を作っていく。

『紅椿破壊』『篠ノ之箒安否不明』『織斑一夏消息不明』

ＴＯ　ＢＥ　ＣＯＮＴＩＮＵＥＤ．

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3727y/

創甲道化織鐵

2012年1月13日20時59分発行